
魔法少女リリカルなのは 烈火の翼

いかじゅん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 烈火の翼

【Nコード】

N8593X

【作者名】

いかじゅん

【あらすじ】

夜天の少女と出会う筈の烈火の騎士。では、その騎士が他の人間の下にいたら？　そして、不屈の少女が翡翠の少年と出会う前に…魔法の力と出会っていたら？　これはそんなお話。魔法少女リリカルなのは 烈火の翼。始まります。

プロローグ(前書き)

OP、miwa『change』

プロローグ

世界は無限に存在する。その時、誰が何を……どんな選択をしたかで『可能性』という物は、無数に広がっていく。

例えば彼らの物語ならば、不屈の少女が翡翠の少年とすれ違いながらも、誓いと共に絆を深めていく話。

夜天の少女が翡翠の少年と偶然に出逢い、不屈の少女も含めて三角^{トライア}関係を繰り広げる話……とか。

たった一つの選択で未来が変わり、たった一つの選択で悲劇が生まれる。

一つの部屋にいる彼が、何処からか一冊の書物を取り出す。それを膝の上に置き、ゆっくりと書物を開く。

「――あり得るかも知れない未来の一つ。無数に枝分かれた可能性。近い物はあるかもしれない。だけど、全く同じ物は決してない。これから始まる物語も、それに当て嵌まるよ。さて、観てみようか？
これから始まる、物語を……」

書物のページから光が放たれる。

これは『I F』だ。もし、不屈の少女が翡翠の少年と出会う以前に、魔法の力と出会っていたら？

そして――夜天の少女と出会う筈の烈火の騎士が、別な人間の下に

現れていたら？

——偶然など無い。これから始まる物語は、すべて必然なのだから。



「~~~~~♪」

まだ雪も溶けない1月の下旬。そんな肌寒い日に、鼻歌を歌いながら上機嫌で歩いている少女がいた。

ツインテールに纏められた茶色の髪は、今にも動き出しそうだ。今は青いマフラーに隠れているが、彼女の首には主の感情に呼応するかのように光る蒼白い宝石が掛かっている。

そんな彼女が、アレ？ と呟きながら首を傾げた。何かを不思議に思って首を傾げたのだろうか……？

「……はあ」

いや、どうやら違うらしい。少女の表情は呆れに近い感じ、またか、と言いたげな表情になった。ため息を吐く彼女の視線の先には、店から出てくる一人の人物が居る。

髪は金髪の腰まで掛かるロングストレート。何よりその容姿は、誰もが見惚れてしまいそうなほど――美しい。

まあ、確かにその容姿にも目が行くが……その腕には抱き枕にも使用できるだろう、巨大な熊のぬいぐるみが抱き締められていた。

で、そんな容姿も持ち物も目立つ人物に、少女は走って近づいて行き、隣に追い付いて少女に気付いた人物に向かって言葉を放つ。

「師匠――本当に何個、ぬいぐるみを買うつもりですか？」

「こ、これを買ったら何か思い出せそうだったから……」

「その言い訳はもう聞き飽きましたっ!!」

「あ、あはははは……」

少女の説教の様な叫びに、相手は半笑い気味に誤魔化す。これは、彼女らの通常会話のようだ。

「全く、師匠は自分の部屋をぬいぐるみで埋め尽くすつもりですか？」

「むう。そんなに買ってませんよ」

「師匠は、いつかやりそうなんですっ!!　　って言うか、本当に生まれてくる性別……間違えてませんか？」

「まあ、それは否定できないですね。あ、でも何か思い出せば男っぽくなるかも!!」

「――いや。それはそれで違和感しかないので、私としては止めてもらいたいです」

そんな会話をしながら、二人は歩いて行く。話を聞くに、どうやら金髪の彼は……信じがたい事に男のようだ。

そして少女は彼が男っぽくなったのを想像……できない。そんな事、師匠が何かを思い出してもあり得ないかも、とかちよつと失礼な事を少女は考えていたりする。

「ねえ、なのは。私に対して結構失礼な事、考えてませんか？」

「気のせいです。気のせいだったら気のせいです」

自分の思考を読まれて誤魔化しながらも、相変わらずふざけスペックだなあ、とか再び失礼な事を考える少女、高町なのは だった。

そんな感じで話ながら歩いていた二人が、そろって立ち止まった。二人の目の前には、立派な一戸建ての家がある。その家の鍵を開けたのは、なのはに師匠と呼ばれている彼だ。どうやら、ここは彼の家らしい。

「じゃあなのは、私はこれで」

「ししよー。私の家に泊まらないんですか？」

「そんなに何度もお世話になれませんよ」

なのはのさりげない泊まりの誘いを、彼はやんわりと断り家の中に

入る。

家に入った彼は、真っ直ぐリビングに入り、ちょうどテレビが見れる位置にあるソファに座る。

暫くそうしていたが、抱き締めているぬいぐるみにちよつと顔を埋め、一言呟いた。

「……寂しい」

まあ呟いても、彼の言葉に反応して言葉を返してくれる人はいない。沈黙だけが辺りを支配するだけである。

やっぱり泊まりに行けばよかったかも……とか思っても後の祭り。と言っても、なのはにメール一通入れればあつという間に飛んでくるだろうが。

寂しい気持ちを押さえ込み、彼は自分しかない家を移動して、ぬいぐるみだらけの自分の部屋のベッドにポスン、と倒れ込んだ。

「寂しいなあ。どうせ、短い命なんだから——誰か一緒に居てくれないかなあ」

随分とネガティブな発言だが、強ち間違ってもいない。彼は家族がいない……いや、彼自身が分からないのだ。自分の家族が生きているかすら。

そして、そんな彼の命すら……。だが、彼の願いが誰かに届いたのか……それは分からない。

「ふえ？」

しかし確かに、彼の願いは叶う。誰かが仕組んだのか、それとも何かの運命か、それも分からない。確かな事は物事に偶然などない。何が切っ掛けでも、これは彼が望み、どんな形であれ——それに彼女が応えた。全ては……必然で起こる出来事だ。

——真紅の三角形の魔法陣が、部屋の真ん中に展開され、そこから一人の女性が姿を現す。

一言で彼女を現すなら、凜々しい、という言葉がとても似合うだろう。桜色の髪をポニーテールに纏めているのも、凜々しさに拍車を掛けている。

その女性の姿に、彼は目を奪われた。もう、見惚れてしまったいると言っても、過言ではない。

「^{シグナム}剣の騎士——シグナム。主の騎士として……ここに在り」

二人の物語は、もう始まっている。剣の騎士シグナムと彼の……ヒナの物語は——必然なのだから。

プロローグ（後書き）

さてさて、この小説は『魔法少女リリカルなのは 時空の双剣士と
たった一つ守りたい物』の発生作品です。と言っても、ぶっちゃけ
見なくても分かります。

因みに、この小説は恐らく不定期更新になると思われます。感想、
意見、等々をお待ちしています。

では、次回をお楽しみに！！

第1話（前書き）

今回は無印編に向けてちよつと駆け足気味かな？ とりあえず、第1話をお送りします。楽しんでもらえたら嬉しいです。

第1話

「あの……結局、あなたは誰なんですか？」

「私は主を守護する騎士。シグナムです」

とりあえず、突然現れた彼の騎士を名乗る女性――シグナムから話を訊くために、彼は自分の部屋からリビングに移動していた。

一つ目の質問は、彼女が現れた時と変わらず、自分の騎士と名乗っている。まあ、これで予備知識がないなら訳がわからないのだろうが、彼女が出現した時に展開された魔法陣……あれは自分や弟子と友達も知る魔法と同じ物だろう。

何か変な事になったな〜とか思いつつも、彼女をほっぽり出すわけにもいかないので、彼は質問を続ける。

「私の騎士ですか。じゃあ、何で私の所に？」

「いえ、それがその……」

シグナムが突然、先ほどのキリキリした表情から一変して少し困った様な表情に変化した。

彼は彼女の変化を不思議に思ったが、思考を働かせて原因を考えると、すぐにある可能性にたどり着いた。

「もしかして……分からないんですか？ あなたが私の下に来た理由」

「は、はい。恥ずかしながら……」

今度は、ちょっと困った事になったなとか彼は考えていた。来た理由さえ聞ければ、自分の友人に頼んで何が原因かを調べられたのだが……まあ分からないものは仕方がない。

シグナムが嘘をついている様にも見えない。と言うか、嘘をつける性格では無いよね、というのは話をしていて何となく分かった。ふと彼は時計を見て思う。そういえば、そろそろ夕飯の時間だった。

「まあ、分からないものは仕方ないですね。とりあえず準備してた夕飯でも出しますから、ちょっと待っててください」

「あ、いえ主。私は別に食事を取る必要は――」

ない、と言い掛けてその場に「くぅぅぅぅぅ」という大きく可愛らしい音が聞こえた。とたん、シグナムの顔が真っ赤に染まる。

どうやら、彼女のお腹の音だったらしい。その音を聞いた彼が笑いを堪え、それを見たシグナムがさらに顔を赤くする。

用意していた夕飯は、彼女の胃袋の中に全て消えてしまいそうだった。

「お、美味しいですっ!!」

「そう。よかった」

結局、夕飯を食べる事になったシグナムだったが、予想どおり用意

していた夕飯を全て食い尽くす勢いで箸を進めていた。とはいえ、夕飯自体をあまり用意していた訳ではなかったので、某腹ペコ騎士王ほどの勢いではないので悪しからず。

それを笑顔で見ていた彼だったが、ちょっとした事に気が付く。

「そうだ！ まだ私の名前、教えてなかったですよ。私、ヒナギク。みんなは“ヒナ”って呼ぶんですけどね」

「ヒナギク……ですか？」

食事をしていたシグナムが、ちょっと不思議な顔をする。それもしようがないか……と思いヒナは苦笑する。

自分が男だと教えているから、女性の様な名前を不思議に思ってもしょうがない。

「変だよ。男なのにヒナギクなんて名前で」

「い、いえっ！！ そんな事はありませんっ！！」

「――あのね、私は……昔の記憶がないの」

「え――？」

唐突な自分の主の告白に、シグナムは絶句してしまう。

何故だろう、話すつもりはなかったのに、ヒナは自分の事を口に出してしまう。

「このヒナギクって名前も、私がヒナギクの花を見て、何となくつけた名前。だから、私は自分の本当の名前は知らない。両親の顔も、そもそも両親が生きているかすら分からないの」

「主……」

ヒナギクは自分の生まれなど知らない。気が付いたらこの町にいて、何も思い出せないままこの町にとどまっている。

けど彼は、自分では幸運な方だと思っている。何も思い出せないけど、なのはを含めた高町家の人たちに会えたし、友人もできた。

だけど、やっぱり独りはどうしても不安になる。だから……っという訳ではないけど。

「ねえ、シグナム。もし良かったら……私と一緒に居てくれないかな？ 独りは……どうしても不安になるから——」

ただ、そんなに長く一緒には居られないと思う……とは、続けられなかった。

そして、ヒナの願いにシグナムの答えは——

「主、私はあなたの騎士です。あなたが望むなら、いつまでも共に歩みます」

そんなもの、訊く前から決まっていただろう。シグナムの誓いを聞き、ヒナは無邪気な笑顔を浮かべる。

この日から……シグナムとヒナギクの共同生活が始まった。



「事の経緯としては、こんな感じですね」

「それで急に、女性の服を選んでください、何て私に言ってきたわけですか」

高町なのはの両親が経営している店『翠屋』。そこでは、なのはがやっと事の顛末を理解できた、といった感じだった。

ヒナから掛けられてきた電話で、いきなり女性の服を選ぶのを手伝ってくれ、と言われた時は思わずいに正しい性別に目覚めたか、とかなり失礼な事を考えたのはだったが、待ち合わせ場所にいたシグナムの服を選び、そして翠屋で説明を聞いて理解できたらしい。

因みに、その話題のシグナムは……翠屋特製のシュークリームをパクついていた。これで三つ目……やっぱり栄養は胸にいくのかな？

とかなのはは純粹に失礼な事を考える。

そういえば、師匠の話だとシグナムさんは魔法陣から出てきたって言ってたよね……。あっさり思考を切り替えたなのは、ちよつとした疑問を口にした。

「シグナムさん。そういえばデバイスって持ってるんですか？」

「デバイスか……その、前は有ったと思うのだが……」

「前はって、今は無いんですか？」

「すまない。記憶が曖昧なんだ」

シグナムは本当にすまなそうに、表情をシュンとさせる。ただ、手に持ったシュークリームがかなりシュールだ。

質問したなのは的には、ここまで真面目に返されるのは予想外だったのか、少し焦った様子で言葉を返す。

「ああ、別にいいですから！！ でもデバイスが無いなら、裏月りげつさんに相談してみますか？」

「裏月？」

「一言で言えば、私達のド○えもんですね。まあ普通に人間ですけど。とりあえず会いに行きましょう」

シグナムの疑問に対して実に単純な返答をしたヒナが、席から立ち上がった。それに続いてなのはとシュークリームを持ったシグナムが立ち上がるとして——パァン、という銃声音が店に響いた。

何事かと店の入り口を見ると……そこにはジャンパーにジーパンに覆面の三人組が居て、三人の手にはそろってトカレフの拳銃が握られていた。

「全員動くんじゃないやねえ!!」

どこからどうみても、完全に強盗である。翠屋の中にいた客は騒然となり、シグナムは瞬間的に戦闘態勢をとるが……ヒナとなのはを見ると、この人たちバカでしょ、という表情をしていた。

——そもそも、この強盗達は致命的な失敗をしている。

何故わざわざ喫茶店を襲ったのだろうか？ まあ普通の喫茶店なら良かったかもしれないが……生憎、襲った店が悪すぎた。

強盗の一人が騒ぐ客を黙らせようと、拳銃の引き金を引こうとして——自分の拳銃が無くなっている事に気が付いた。

「お客様。店内にこういった危険物の持ち込みはご法度です」

すると、男の隣にはいつの間にか拳銃をその手に奪い取り、笑顔で強盗にそう告げる翠屋の店主……高町士郎が居た。

「なっ!？ テメ、ごあっ!？」

「そこまでだ」

ようやく士郎に気が付いた強盗の一人が彼に銃を向けたが……今度のはなのは兄、高町恭也が強盗の体をいとも簡単に押さえ込んだ。

さすがにと言うか今さらと言うか……焦りを感じたのか、人質を取ろうと走り、そして計画どおり人質を取ったが——どうやらこの強盗、とことんな迄に運が無いらしい。

「う、動くなあ！！ 動くとかいつを撃つぞっ！！」

「あ、主っ！！」

その強盗が人質に取ったのは、シグナムとなのはからほんの少し離れた場所に居た、ヒナギクだった。

だが、なのはの表情は、先ほどよりこの人バカでしょ、と言う表情になっていた。一方シグナムは、自分が居ながら不甲斐ないと思っ
たが、ヒナが常人には認識できない速度で強盗の銃に何かしたのを見た。

当然、焦っている強盗は気が付かない。同じくそれを見ていたなのはが、せめてもの情けと思い……まあ無駄だとは思うが一応忠告を出した。

「あー強盗さん？ もう諦めた方が良いと思いますよー」

「うるせえ！ このガキーって、あれ？」

強盗がなのはを黙らせようと、銃を向けて威嚇射撃を放とうとし……何故か引き金が引けない。何度引こうとしても、引き金はガチ、と音を立てるだけだった。

「一応教えてあげますが、トカレフは撃鉄を軽く起こして中間で止めると、安全装置がかかるんですよ。まあでも――」

「これくらい、強盗をやる前に勉強しておいた方がいいよ？」

ヒナの言葉を引き継いだなのは姉、高町美由希の言葉は……恐らく聞こえなかっただろう。なぜなら、その美由希の手によって気絶させられ、地面に崩れ落ちたからだ。

昔の物ならともかく、トカレフ銃のセーフティはヒナがやったように、意外と簡単にかかる。そもそも、銃を手に入れた時に説明を見なかったのだろうか？

何はともあれ、所有時間は僅か一分足らず。知識と運が足りなかった強盗は、遭えなく御用となった。

「――いや……っていうかヒナちゃんなら、人質になる前にこんな素人くらい簡単に倒せたよね？」

「美由希さん。か弱い私にそんな事、出来るわけ無いじゃないですか」

「師匠、笑顔で嘘を吐かないください。まあここは、お兄ちゃん達に任せましょう。じゃあお母さん、行ってきます!!」

「はいはい。行ってらっしゃい」

今さっき強盗に襲われていたのに、あっさり娘を送り出すのは、一重に高町桃子が家族を信賴しているからなのだろう。実際この家族、そんじょそこの強盗なら瞬殺できるし。

そして、主についていくシグナムは思った……自分は、いろんな意味でとんでもない人を主にしたのだな、と。



「裏月さん、入りますよー」

場所は変わってとある家。その家の一室のドアをなのはが軽くノックして、返事も聞かずにドアを開けて部屋の中に入る。

なのはに続いて、ヒナとシグナムも部屋の中に入った。すると、そこにはパソコンと向かい合っている、一人の青年が居た。

返事を聞かずに入って来た、なのは達に対して何か気を悪くする様子もなく、その青年が椅子を回転させて振り向いた。オレンジ色の髪に、銀のフレーム付きのメガネをかけた彼……裏月は、早速とばかりに用件を訊く。

「よおなのは。今日はどうした？」

「実は――カクカクシカジカでコレコレウンヌン――ってな感じで
す」

「……お前ら、また強盗に絡まれたのか？」

裏月の言い方だと、ヒナとなのはの二人は過去に何回か強盗に絡ま

れているらしい。シグナムは妙に気になったので、ちよつと話を訊こうとしたが……その前になのはが話を無理やり切り替えた。

「い、いや。その話はもう良いじゃないですか」

「まあそれもそうか。それで？ デバイスが欲しいのはお前だっけか？」

「あ、ああ」

「使える武器は？」

「剣の系統だな」

「じゃあほら、これで良いだろ」

言うなり、裏月は何かをヒョイ、っとシグナムに向かって投げ渡し、彼女は慌ててそれを掴み取った。

掴んだ物を見ると……それは一本の白い短刀。卍型の鰐を持ったその短刀に、シグナムは不思議と引き付けられた。

「どんな刀かは使えば分かる。ただ、その力の全てを使いこなせるかは……お前次第だ」

「って言うか裏月さん、随分と用意が良いですね？ もしかして、かなりタイミングが良かったのですか？」

「ああ。ま、純粋なデバイスとは呼べねえかもしれないが、最近完全させたモンだよ」

「とりあえず、私達はこれで帰ります。シグナムが、今すぐにもこの刀を使ってみたい、って顔をしていますから」

「あ、主っ!？」

ヒナの言い方に思わずシグナムは顔を赤くしたが、自身の主の言う通りなので反論できなかった。

……そんなこんなで、裏月にお礼を言って三人は帰って行った。そして、一人部屋に残った裏月は近くに置いてある携帯を手取る。一応、連絡しておこう、と彼は思い自分の親友に電話をかけた。

『もしもし。どうかしたか?』

「おお、な——いや、今は家名を継いだから、斬月だったよな?」

『私としては、別にどちらでも構わんがな。で、何の用だ』

「ああ。あの刀……渡しちまったけど、別に良かったよな?」

『——お前、人の家に代々受け継がれている宝具を、本当に再現したのか……』

電話の相手、斬月と呼ばれる人物は、かなり呆れを含んだ言葉を裏月に返す。

話を訊く限りでは、どうやら先ほどシグナムが貰った刀は、斬月の家に伝わる宝具を裏月が再現した物だったらしい。

「しょうがないだろ。出来るもんは出来るんだから」

『……はあ。別に渡すのは構わんが、渡した人間に使えるかが問題だろう？』

「ん、まあ普通に使うだけなら問題なさそうだったな。ただ——本当の意味で刀に認めてもらえるかは、保証できねえぜ」

……先ほど裏月が言った、純粋なデバイスとは呼べないかもしれない——それは間違っていない。と言うか、アレは最早デバイスの域を超えている。もともと、オリジナルとも呼べる刀自体がデバイスではないのじゃないのだが。

斬月の家系に受け継がれている三本の刀、そしてイレギュラーとも言える裏月が再現した刀……普通、刀は人が選ぶものだが、この四本は違う。

人が刀を選ぶのではない——刀が人を選ぶのだ。

『だろうな。さて、私も気が向いたらそちらに行くかもしれん。その時はよろしく頼む』

「ああ、じゃあ旅を楽しめよ」

少し久しぶりに親友と言葉を交わして、裏月は上機嫌になる。

——さて、いい加減アイツのデバイスも完成させるとすっかな。ま、使う機会が来てくれるかはともかく……。

こんなことを考えていた裏月だったが……この彼の予想は、良いのか悪いのかハズレることとなる。

この約三ヶ月後、願いの宝石がこの町に降り注ぎ――幾つもの出逢いの物語が……始まる。

第1話（後書き）

一応、今回までがプロローグみたいな感じですよ。最後を見ればお分かりでしょうが、次回から無印編に入ります！！

原作とは違う展開が多いです。主になのはとユーノが。

感想、意見等々をお待ちしています。では、次回をお楽しみに！！

第2話（前書き）

第2話、完成いたしました。今回から無印編がスタート……ぶっちやけ、原作どこいった？　ってくらい行動が違います。

では、楽しんでもらえると嬉しいです。

第2話

その日、様々な人間の運命を歪める21の宝石が……海鳴に降り注いだ。

運命をねじ曲げられた者は、果たして幸せなのだろうか？ それは、その者にしか分からないだろう。もしくは、同じ願いを持った者にしか。

だが、確かに幻想の宝石はこの町に降り注ぐ。まるで、それが必然とでも言うかのように。

「くそっ……ま、だだ……」

そしてここにも、己の運命をねじ曲げられた人間がいた。いや、この出来事も必然なのかもしれない。

彼が――ユーノ・スクライアが、自身のボロボロな体に鞭を打ち、霞む視界をはっきりさせる。彼の目の前には異形の姿をした者……例えて見るならば、毛玉の化け物だろうか？

それに向かって、少年は術式を組み上げていき、魔法陣を展開して封印を開始する。翠の帯が化け物に絡み付いていく――しかし彼の努力も虚しく、化け物は帯を引きちぎり何処かへ消えてしまった。

「うわっ!？」

同時に、その余波を受けたユーノが吹き飛ばされ、何度か転がったところで漸く止まった。

だが、その姿は誰がどう見ても満身創痍。動く事などできないだろう。が、それでもユーノは必死に体を動かそうとする。

（ダメ……だ。今、アレを逃がすわけに……は……）

そんなユーノの願いも、今の彼の体では叶えてくれない。その意識が途絶える直前、彼の体は光に包まれ、その光が収まると彼の姿はフレットの様な動物に変化した。

恐らく無意識下だったのだろう。次の瞬間、彼の意識は途切れた。

……そんな彼に誰が近づいて来る。まだあどけない少女で、己の金髪の髪をツインテールに括っている。

少女は小動物の状態の彼を、ゆっくり優しくその胸に抱き上げる。

「フェイト、ごめん！ アイツ予想以上にすばしっこくて……ん？
なんだい、そいつは？」

「この子……今は動物の姿だけど、危険な状態だからこうなってる
んだと思う。治療できる？ アルフ」

「まあ、できるけどさ……」

目的の物をほったらかして、いきなりこんなで良いのかねえ……。と、フェイトと呼ばれた少女の使い魔、アルフは考えたが、こういうところが自分の主の良いところだね、と思って目的の物を後回しに傷ついた彼の治療を開始した。

——歪んだ運命の中で、少女と少年は……こうして出会った。



空き地などが多い、人気の無い場所。そこに異形の何かが降り立った。

その異形は、ユーノが封印し損ねた毛玉の化け物。そいつは、まだ暴れ足りない、とばかりに標的を探して視線を彷徨わせる。

「……………!？」

——しかし、それも終わりが来た。毛玉の化け物の体に、桜色をした三本の熱線が次々に突き刺さり、その巨体を揺るがせる。

さらに先ほどより大きい、止めと言わんばかりの赤い帯状の熱線が二本、化け物に直撃。巨体が音を立てて地面に倒れ込んだ。

そして、何処から投げられたカードが巨体に突き刺さり……そのカードに吸い込まれていく。

それが起こったのとほぼ同時に、化け物の近くに誰が降り立つ。機械的な蒼い翼から粒子を撒き散らし、少女が地面に着地するのを

見計らったかのように、化け物を完全に吸い込んだカードが少女の手に宙を舞いながら戻り、少女がそれを掴み取った。

「シリアル????……か」

掴んだカードの中身を見て、少女がそう呟く。カードの中には蒼い宝石が描かれ、それは完全に封印されているらしい。

少女は腰のカードホルスターにそれをしまい、展開していた蒼い翼と武装を解除して――高町なのははその場を立ち去った。



朝早く、高町家の道場ではいつも鍛練が行われている。だが、それが例外的に行われない日がある。

およそ三ヶ月前……そう、シグナムがヒナの下に現れた時からだ。以前からヒナは高町家に泊りにくることがあったが、シグナムが現れてからは当然ながら彼女も、自身の主であるヒナについて来る。

事の始まりは、最初に泊りに来た時に高町家の道場をシグナムが見た事からだ。道場を見た彼女が、ここを使わせて欲しい……と士郎

たちに言い、それを士郎たちも快く了承した。

最初は、士郎たちも近くで鍛練していたが——すぐに止めた。これは邪魔をしてはいけない……と、彼らも感じとったのかもしれない。

そのシグナムは今、道場で座禅を組んでいた。服装は……何故か巫女服。まあ理由は——単純に、彼女の主の趣味である。^{ヒナギク}なに、気にすることは無い。だって本人も気にしてないし、寧ろ気に入ってそうだし。

さて、話を戻す。巫女服で座禅を組むシグナムの膝の上には、一本の長刀が置かれている。

長さは、日本刀より少し長い程度。色は全てが白に彩られ、卍型の鍔、柄頭には途切れた鎖……など、明らかに普通の刀とは違うと解るそれに、シグナムは全神経を集中——延いては心を刀一つに絞る。シグナムがこの状態になって——実に二時間になる。その影響なのか、それともこの状態になると常なのか、彼女の周りの空間はどこか近寄り難い……言うなれば彼女の空間が出来上がっていた。

この状態でいる意味は2つある。一つは……この刀に必要な物、集中力や精神力を鍛える為。

もう一つは——刀との対話の為だ。

前者はシグナムは最初、何をいまさら……と思ったが、やって見て解る。これは思っている以上に、キツイ。だが、そこは剣の騎士。三ヶ月間で、今の様に優に二時間はこの状態を保っていられるようになった。

後者に関しては、どうやらシグナムは一度も対話に入れてすらいな
いようだ。まあ、これはしょうがない。

そもそも、裏月が再現した物とはいえ、オリジナルと対等な刀だ。
恐らくこの刀を受け継ぐ家の現当主から言わせれば、たった三ヶ月
でここまで出来る者はそういない、とでも言われるだろう。

そんなシグナムでさえ、まだ刀との対話に至れないのだから、どれ
ほど難しい事が解る。まあ、単純にこの方法で鍛えたからといっ
て、対話を行えるわけではないのだが。

——実際、シグナムの持つ刀がツンデレなので仕方がない。

それはさて置き、シグナムは閉じていた目をゆっくりと開き、今日
はここまでにするか、と考えて自身の膝にある刀を手に取り立ち上
がった。

と、それと殆ど同時に、道場の中に誰が入って来る。恐らく、シグ
ナムがこの修行を終えたのが分かったのだろう。

「シグナムさん。朝ご飯、できましたよ」

「ああ。……なのは、どうでも良いのだが、いつまで主にくっつい
ているんだ？」

「別に私がくっついてるわけじゃないんですけど……っていうか、
師匠が離してくれないんですよ」

まあ楽な事は楽なんだけど、この状態だと朝の鍛練ができないんだ
よね、となのはは心の中で付け加えた。

そんななのは現在の状態は……寝呆け眼のヒナギクに胸の辺りで抱き抱えられてる。ぶっちゃけて言えば、人間抱き枕的な状態だ。一応弁解をさせてもらおうと、もともとヒナギクはそこまで朝は弱くない。寧ろ、かなり強い部類に入るだろう。

ただ、それが高町家での泊りになると話は別だ。泊りになると、ヒナギクとなのは一緒に寝るのだが……なのはの抱き心地がいいのか単純に暖かいからなのかは不明だが、確実にヒナギクはなのはを抱きしめて寝る。

そして、なのはは起きててもそんな状態なので、仕方なく寝呆けたヒナギクに指示を出してなのはは動く訳である。

以上が、シグナムとヒナギクが高町家に泊りに来た時、朝に起こる現象なのである。



さて、高町なのはは一応、というか“自称”平凡な小学三年生である。まあ成績優秀スポーツ万能、おまけ(?)に魔法まで使える時点で説得力は皆無に等しいのだが、気にしてはいけない。

そんな“自称”平凡な小学生、高町なのはの登校手段は距離の問題もありバスだ。で、そのバスで彼女のほぼ定位置となっているのが、一番後ろの席の右端だ。

今日もいつも通りこの場所を陣取り、目を閉じた。もちろん、これは睡眠をとるためではない。

——システム、脳とのリンク完了。指定項目とデバイス名を、どうぞ。

——指定項目は戦闘シミュレーション。デバイス名……ん？

ふと、なのはは閉じていた目を開き、横を見る。すると、そこには見知った顔の少女が一人……いや、ついでにもう一人いた。

「おはよう、なのはちゃん。もしかして起こしちゃったかな？」

「ううん。別に寝てなかったから。おはよう、月村さん」

「ちゃんとすずか！！ 何でそんな奴に話し掛けてんのよっ！！」

「バニングスさん？ そんなにバカみたいに叫ぶと、もっとバカになるよ」

「誰の所為だと思ってるのよーーーー！！！！！！」

……バカの部分は否定しないんだ。

さてさて、別に説明の必要はないと思うが一応。なのはに好意的に

話し掛けてきたのは、月村すずか。なのはに突っ掛かってきた方が、アリサ・バニングスである。

この二人となのはの関係を表すと、すずかが普通の友達。アリサが腐れ縁と言った感じが。

すずかが、時間が合えば彼女から話し掛ける様な関係。アリサは……まあ見ての通り、アリサが突っ掛かって、なのはが偶に毒を吐きながらからかったりスルーしたりする関係だ。

二人が座った後も、なのはとアリサはすずかを挟む形で口論（アリサが一方的に）繰り広げている。ここまでは偶に起こる日常——だが、そこにいつもとは違う事柄が入り込んだ。

突然、なのはの首に掛かった蒼白い宝石がキラリと光った。それを見たなのは……いきなりサボリ確定かぁ、と隣にいるすずかにこそそこそくと何かを伝え、すずかもそれを了承した。

一体何を伝えたのか、それが分かったのは朝のホームルームで行われる出席確認の時だった。

「高町……。ん？　高町はどうした？」

「先生……。なのはちゃんは、口から血を吐いた人の看病に行きました」

「そうか。なら仕方ないな」

この瞬間、すずかと教師を除いてクラス全員がずっとこけたのは、言うまでもない。

まあ、ある意味なのはが教師に信頼されている証なのだが。

その頃、なのはは町の神社に来ていた。その手には、なのはが封印した物と同じ八面体の青い結晶がある。さぼった理由は、これ自分のデバイスが感知したからだ。

サボりの言い訳は……うん、別に嘘はついてない。だって前にあったし、これからもあるかもしれないから。

彼女がこの宝石——ジュエルシードを回収しているのには、ちょっとした訳があった。



「ジュエルシード？　それがこの町に落ちてきたんですか？」

「ああ。入ってきた情報だと、どうやら輸送中の事故らしい」

二日前……彼女のデバイスが何かを感知し、それを裏月に確かめてもらうと、どうやら彼も知っていたらしく軽く説明してくれた。

『ジュエルシード』。裏月が言うには、スクライアという民族が発掘した物なのだが、それが輸送中の事故で――何故かピンポイントで、この海鳴市に21個全てが落ちてきたらしい。

「なんか……この町、呪われてるんじゃないですか？ 21個全部が落っこちてくるなんて」

「で、できれば否定したいところなんだがな。まあ、そのうち管理局が回収に来るだろうが、流石にそれまでほっとく訳にもいかねえ。とりあえず俺はこのまま情報を集めっから、お前は回収を頼めるか？」

「了解です」

と、いうわけで、こんな感じの理由でなのはジュエルシードの回収に勤しんでいる訳である。

自分の他にも、ヒナギクとシグナムに協力を頼む、という選択肢も有ったが……シグナムに話を通すだけにしておいた。ヒナギクに協力を申し出るなど、彼の事情を知っている人間からすれば論外と言わざるを得ない。

シグナムは、昼間などは近くの剣道場で講師をしているので、主に夜中に動いてくれる。

――今、シグナムさんがニートとか思ってた人、シグナムさんに「おっと、こんな所に練習台が」と言われながら仮面を出されて斬られますよ？

なんとなく、なのはは誰かに向かって警告を出した。余談だが、近

い将来紅の幼女……ではなく少女がこれに近い事を言い、なのはの警告に近い結果になるのだが、まあ完全な余談である。

「さてと、ちゃちゃっと封印しますか」

「あの……」

「ふえ？」

彼女がジュエルシードを封印しようと、カードを取り出そうとする
と、誰がなのはに話し掛けてきた。突然の事にも反応したなのはが、
取り出そうとしていたカードをポケットの中にしまい込み、そして
声のした方を向く。

そこにいたのは、自身の師匠に似た金髪の髪をツインテールで括り、
歳は自分と同じくらいだろうか？ そんな少女の視線の先は……自
分の持つ青い宝石。

「すみません。それを渡してくれませんか？」

「……あなた、これが何なのか、知っているの？」

なのはの問いに少女——フェイトはコクリ、と頷いた。それが示す
答えは、少女もなのはと同じ“魔導師”なのだろう。

さて困った。自分が魔導師とばれるのは、出来るだけ避けたい。だ
が、少女がなぜジュエルシードを集めるのか、興味があるのも事実
だ。

となれば……ちょっとした交換条件といきますか。

「うーん、上げてても良いけど……変わりに名前、教えてくれない？」

「名前……？」

「うん。そしたら、この宝石を上げる」

「――フェイト。私はフェイト・テストロッサ」

少女はなのはの条件に一瞬迷ったが、それは本当に一瞬。なのはに少女は自身の名前をためらいなく教えた。

そんなフェイトに、なのははささつと近づき――その手にジュエルシードをギュツ、と握らせた。

なのはの行動にフェイトは、まさにポカン、といった表情になる。まさか、なのはが本当に渡してくれるとは思っていなかったのだらう。

「え？」

「はい。名前、教えてくれたでしょ？　じゃあ、縁があればまた――フェイトちゃん」

こうして、不屈の少女と雷光の少女は出会った。

幻想（願い）の宝石が創りだす、歪んだ運命は……なのはやシグナム、裏月すら巻き込み――加速していく。

この物語は、一体どこに向かうのか――それはまだ、誰にもわから

ないのかもしれない。

第2話（後書き）

……そんなこんなで、フェイトがユーノを回収。なのはは早くも戦闘回避……これ、なんてユノフェ？　こんな感じで、原作のエピソードを変えつつ進んでいくと思います。感想や意見等をお待ちしています。

では、次回をお楽しみに！！

第3話（前書き）

第3話、完成しました。ちょっと遅れた理由は、友達の家泊りに行ったりで全然執筆をしていなかったからです（オイ）

この話は昨日書き始めて、かなり急ピッチで進めたのでおかしい箇所があるかもしれませんが、その時は指摘をお願いします。

では、本編をお楽しみください！！

第3話

「テストロッサ？ ……本当にそう名乗ったのか？」

「はい。裏月さん、知っているんですか？」

「ああ、まあ正確にはそいつの親だな」

なのはの言葉に裏月は一度頷き、自分の前にあるパソコンのキーボードを高速で叩き始めた。

この間の出来事、フェイト・テストロッサとの邂逅時、なのはが彼女の名前を問うた理由は2つ。一つは、なのは自身が彼女に興味を持ったから。もう一つは、知識が豊富な彼が、このように何かを知っている可能性があったからだ。

たとえば少女自身が有名でなくとも、その親が有名という可能性はある。相手が魔導師ならなおさらだ。

数秒もしない間に、パソコンの画面に誰かの顔が映った。なのはが画面を覗くと、それには一人の女性が映し出されている。

「裏月さん、この人がフェイトちゃんの母親ですか？」

「そ。プレシア・テストロッサ。ミッドじゃかなり有名な魔導師“だった”らしいな」

「だった……ですか」

裏月の言い方だと、どうやら有名だったのは昔の話らしい。今はどうしているのか……なのは疑問に答える為に、裏月はパソコンの画面を切り替える。そこに乗っているデータを彼女が読んでいくと、その表情はみるみる不快感を顕にしていっていった。

それも当然だろう。何せ、その情報は少女にとって……いや、普通の人なら不快な物でしかないのだから。

「これ、自分たちの失敗を、全部プレシアさんに押し付けたって訳ですか」

「ああ。プレシアが危険だと判断した実験を強硬。結果、事故によって死者が出ちゃった。しかも、その責任を全てプレシアに押し付けた……まあ、これはプレシアが行方をくらました後、捜査によってこいつの責任じゃないって分かったんだが——重要なのはそこじゃない」

彼がさらに画面を切り替える。そして、そこに映っている人物を見て、なのはは目を見開いた。

「なに……これ。この人、フェイトちゃんと瓜二つ……」

「やっぱりな。アリシア・テストロッサ。十年前、さっきの事故で死亡したプレシアの“一人娘”だ」

「一人娘！？ 父親は——」

「とっくに死んでる。しかも、アリシアの事はかなり溺愛していたらしいな。たった一人の家族……かなり精神的にきただろうぜ」

——おかしい。まず、アリシアとフェイトの関係。容姿が瓜二つなのは、双子という事ならば説明がつくが、一人娘なのだからそれはほぼあり得ない。

そして、さらにおかしいのはフェイトの年齢だ。フェイトの容姿からして、せいぜいなのはと同じくらいだろう。だからおかしい。

事故が起こったのは十年前。少なくとも、その頃にはフェイトは生まれてすらいらない筈だ。つまり、最低でもそこから一年か二年以内にフェイトは生まれた計算になる。

父親は既に死に、プレシアは精神的に不安定な状態で、アリシアと瓜二つ——偶然にしては出来過ぎている。

ここで少女の頭脳は、一つの可能性を導き出した。ただ、それはなのはにとってはあつて欲しくない可能性だ。

だが、それでも訊かなければならない。自分が思い付くのだ、彼がこの可能性を配慮していない筈がない。

「裏月さん……ミッドにクローンの技術って、ありますか？」

「——結論だけ言うなら、ある。違法行為だが、技術的には完全なクローンを生み出せる」

……普通ならば、クローンなど何をバカな、と切って捨てる人間が殆どだろう。だが、少なくともこの地球にとっては異常な魔法世界の技術を使えば、可能性はあつた。

そしてその可能性は、裏月によって完全に肯定されてしまった。まだ確定ではないが、それでも可能性としてはあり得る話だ。

これについても調べておくか……と、裏月か自分のメガネを指で上げて位置を直し、突然話を変える。確かにフェイトの事も大事だが、忘れてはいけない事は他にもあるのだ。

「問題は他にもある。プレシアが居るという前提で、フェイトがジュエルシードを集める理由だ」

「願いの宝石、クローン……アリシアちゃんとフェイトちゃん。このキーワードから導き出される可能性は——まさか……！」

……ここまでキーワードが揃えば、なのはは彼女の目的が確信はないが予想できた。

しかし、裏月にとっては完全に確信していた。それは彼自身が、彼女に近い——大切な人を突然失う——事を体験しているからだ。

失った人の関係の違いがあらうとも、同じことを願うだろう。それは、裏月として例外ではなかった。

恐らく、今のプレシアと過去の裏月の目的は同じだろう。下手をすれば、今も裏月はプレシアと同じことを願っていたかもしれない。

——それは、あらゆる人が願い、そして叶わぬ“ユメ”。かつては裏月も追い求め、だがその天才的な頭脳を持っただけでも叶わなかった願い。

彼女はその叶わぬ“ユメ”を叶えようとしている。そんな事は、幻想でしかないだろうに……。

彼女が追い求めるもの……それは——

「……死者を生き返らせる。それが――」

「それがお前の願いか、プレシア」

裏月の言葉を引き継ぐかのように、全く別の場所で彼の親友がそう呟いた。

彼の手には一通の手紙があり、彼はそれを強く握りしめる。

「あのバカ者が……!!」

彼の呟いた言葉に込められたものは、手紙を送った人間に対しての怒りや悲しみが含まれているように思えた。

――だからこそ、彼も動き出す。向かう先は……自身の親友が居る場所。

「早まるな……早まるなよ、プレシア!!」

この歪んだ物語はさらに加速し、誰にも止められない。さまざまに願いの先には……何が在るのだろうか？



「あれか……」

時間と場所が変わり、ビル等が立ち並ぶ市街地。そこに人影は一切ない。いくら夜と言えども、かなり異常な光景だった。

それも当然。何故なら、この場所一帯には魔法によって結界が張られているのだから。

そして、空中に浮かぶ魔法を帯びた宝石……ジュエルシードを見つめるのはシグナム——と、その主のヒナギクだ。

「へえ、なかなか綺麗ですね」

「はあ……」

どうしてこうなったのだろうか？ その問いの答えは、シグナムが一番知っているのだが、そう思わずにはいられなかった。

まあ、シグナムでも気付く近場でのジュエルシードの発動。それをヒナギクが気付かないわけがない。で、彼がこんな物をシグナムに任せて放っておくわけがなく、こうして一緒に来てしまった、という事だ。実際、シグナムでは結界を張れないので助かったと言えば助かったのだが。

さて、さっさと封印してしまうか、とシグナムは何処からかカードを取り出し、それをジュエルシードに投げつけた。そのカードはやけにあっさりジュエルシードに刺さり、あっという間に青い宝石を

取り込んでシグナムの手元に戻ってきた。

本当にあっさり済んだな……シグナムはそう思ったが、すぐに思考を切り替えた。

どうやら、相手は気配を隠す気など毛頭ないらしい。結界内に誰かが侵入したのはとくに気付いていたが、ここまで隠す気がないとはな。

暗闇の中から、二人の侵入者が姿を現した。一人は金髪の少女、もう一人は犬耳の様な物が付いている女性だった。

「……それを渡してください」

「断る、と言ったら？」

「無理にでも、奪います」

「ケガしたくなかったら、とっととそれを渡しなっ!!」

シグナムは一度、諦めた様にため息を吐いた。これは、一切話を聞くつもりなど無い。特に使い魔——シグナムからすれば守護獣——の方はすぐにでも襲い掛かって来そうだ。

これはもう、選択肢が無さそうだな……できれば主は巻き込みたくなかったのだがな、とシグナムは考えたが——

「シグナム、そっちの子は任せます」

「なっ!？」

「あ、アルフっ!？」

まさに早業。ヒナギクが転移魔法を起動、シグナムの返事を聞く間もなくアルフを連れてどこかへ転移してしまった。

シグナムは……今度は頭を抱えながらため息を吐いた。まあ彼にとっては、シグナム一人に任せるという選択肢はないので当然と言えば当然なのだが。

こうなってしまったら、仕方がないな。そう思いシグナムは目の前の少女に意識を集中させた。

「どうやら、お前と私の一騎打ちらしいな」

「構いません。私もアルフも敗けませんから」

「大した自信だな」

だが、少しは自分達の力量を弁えた方がいい。確かにフェイト達の力量は、普通の魔導師に比べれば高い方だろう。

しかし、この二人は普通の魔導師の枠には収まらない。いや、魔導師ですら無い。

——それに、あの程度の輩に私の主が敗ける筈がないからな。

シグナムにはその自信があった。だからこそ、自分は目の前の少女に集中できる。

既に目の前の少女は、己の武器を構えて戦闘態勢をとっていた。

ならば自分も、それに応えよう。シグナムは卅型の白い小刀を取り出し、それを前へ突き出した。

それだけ、たったそれだけの事なのに、少女はいきなり自分の体に重圧が掛かった様に思えた。

（なに……これ……）

（何なんだい！ コイツはっ！？）

時を同じくして、少女の使い魔が戸惑いを感じていた。転移してすぐに、彼女は自身の主の下に戻る為にヒナギクに攻撃を仕掛けたのだが――その攻撃は一切当たらない。

使い魔、アルフの得意な距離である筈の接近戦が、全て通用しないのだ。あり得ない、自身の力量を理解しているアルフはそう思ったが、現実になんか起こっているのだ。

対して攻撃を避けるヒナギクは……意気がった割りにはこの程度かと失望にも似た感情を抱いていた。

これならば、自分の弟子と戯れ方が数倍楽しい。別に自分はバトルマニアでも何でもないが、こんな時でもない、自分の弟子にまともに戦わせてもらえないので多少は期待していたのだが……期待外れもいいところだ。

それに――ヒナギクの表情がほんの一瞬だが歪む。それは、自分の胸に痛みが走ったからだ。

そろそろ、時間的にキツい頃ですね。相変わらず不便な体です……
そう考えたヒナギクは、動いた。

「ッ!？」

次の瞬間、殴り掛かろうとしていたアルフは、本能的に後ろに跳んだ。避けるだけだったヒナギクの手には……一瞬前まではなかった一本の刀が握られていた。もし、退くのが少しでも遅ければ、アルフの意識は刈り取られていただろう。

ヒナギクが刀を顔の前に構え、その瞳をゆっくりと閉じる。

シグナムが左手を刀を構える右手に添え、さらに力を込める。

一見無防備に見えるが……相對している二人だから解る。下手なことをすれば、自分たちは一瞬でやられてしまう、と。

ヒナギクとシグナム。二人の魔力ではない何かの力が膨れ上がっていく。

「散って——」

ヒナギクの刀の刃が、その姿を散らし月の光を受けながら舞う。

「煌めけ——」

シグナムを白い光が包み込み、その光の奔流から少しづつ刀が姿を現す。

「――『千本桜』」

月の光を受けた刃が、桜のように美しく舞い散る。

「――『天鎖斬月』」

巫女の姿をした彼女の持つ刀が、一切の汚れなく白く煌めく。

今、姫と騎士が……歪んだ運命を斬り開く刃を振り下ろす。

第3話（後書き）

Q. なんで天鎖斬月と千本桜？

A. 前者は別の作品（双剣士）で引っ込みがつかなくなったから。
千本桜は……趣味？（コウ）

はい、そんな感じで二人の武器が登場しました。あ、何かすいませ
ん。千本桜は……ただいま大スランプ中の双剣士でオリジナルの武
器の登場がかなり先なので、それを使う訳にもいかずに完全趣味に
なりました（知らんがな）

ただ、設定とかは原点とかなり違います（特に天鎖斬月が）。いや、
そうしないと色んな意味でまずいですし。あと、いつかヒナとシグ
ナムの対決を番外編でしてみたかったりww

では、感想や意見などをお待ちしています。次回をお楽しみに！！

第4話（前書き）

第4話、完成いたしました。今回からもオリスストーリーが入ります。いや、っていうかこうでもしないと無印がめっちゃくちや早く終わるんですよ。もはや、原作どこ行ったって感じですよ。まあ自分のせいですが。

では、本編をお楽しみください！！

第4話

「刃が消えた……？ 何のつもりだい、それは！？」

相対するヒナギクとアルフ。その身に何かも分らない重圧を受けながら、アルフは叫んだ。彼が何を言った途端、刀の刃が消えた。アルフからすれば、自分が舐められているとでも思ったのだろうか？

対するヒナギクは、何も言わない。いや、言わないのではない。何も言う必要がないのだ。

舞い散る桜の刃……それが見切れていない時点で彼女の敗北は――すでに決まっているのだから。

その変化は、一瞬で起こった。無数に枝分かれした、千本桜の刃。それが月の光を浴びて、名の通り桜色に輝く。その刃が、まるで風が吹くように、アルフの体を通り過ぎた。

その瞬間……アルフの体に突然衝撃が走り、急速に意識が遠退いていく。

(なん……だい……)

声に出す事すらできない。彼女の体が傾く。だが、ヒナギクはそれを見ずにその身を翻した。もう、アルフに興味がないとばかりに。アルフの拳は、一度もヒナギクに届くことはなかった。二人の物理的な距離は近い……しかし、絶対的な距離がある。

まさに“格”が違う、と言わんばかりに、アルフは地に墜ちながら意識を失い、ヒナギクは悠然と歩きだし、千本桜の刃は刀の刀身に戻った。

「っ……!!」

だが、突如ヒナギクが咳き込み始める。少しして収まったが、口を押さえていた手のひらには、彼の騎士にはとても見せられない……血が吐き出されていた。

「今日は一段と、調子が悪いですね……」

まだ十分程度しか戦ってないはずなのに、と付け足して彼は呟く。まあ、自分の弟子からは五分がギリギリ許容範囲、と念を押されていたので当然だが。

少々遊びが過ぎましたね……と、全く本気を出していないらしい事をヒナギクは思った。事実、全く本気を出していなかったのだが。

さて、私の騎士様はどうなりましたかね。などと、ヒナギクは自分の体を一切気にしていない様な事を考えているヒナギクだった。彼の弟子が聞けば、怒り狂いそうな考えだが。

そんな彼の騎士はというと、その手に白い刀、『天鎖斬月』を持ちフェイトと相対していた。

彼女自身もそうだが、彼女の持つ天鎖斬月は本来の力ではないにして、圧倒的な存在感を放っている。

そんな彼女と相対するフェイトは、一瞬たりとも目が離せない。離

してしまえば、自分は一瞬にして敗北してしまうだろうと、直感で理解していたからだ。その為、自身の使い魔が敗北したことにも、全く気が付かなかった。

自分と同格と見る、何てことはおこがましい。完全に格上として見なければ……確実にやられる。

——そんな事を考えている時点で、甘過ぎる事に彼女は気が付かない。

フェイトからすれば本当に突然、シグナムの姿が消えた。フェイトには、消えたようにしか見えなかった。

「どこに……っ!？」

反応できたのは、奇跡的だっただろう。彼女の黒い斧状のデバイスである『バルディッシュ』ですら、防壁を張る事は愚か反応すらできなかったそれを、フェイトはバルディッシュの本体で受け止めた。だが、受け止めただけで衝撃は殺し切れずフェイトは吹き飛ばされた。彼女が受け止めたのは、彼女の右側から振るわれた天鎖斬月……つまりはシグナムが振るったものだ。

刀を受け止められたシグナムは、少々驚いたようだ。今の一撃があの少女に反応されるとは、思っていなかったのだろう。

——これは、少しは楽しめるかもな。

そんなシグナムの少々嬉しそうな笑みを、フェイトは見る間もなく飛行魔法を行使して空中へ舞い上がった。

近距離は不味い……そんな考えでフェイトは距離を取った——彼女からすれば、だが。残念ながら……シグナムからすれば、この程度は距離を取った事にはならないことを、フェイトは次の瞬間に思い知る。

「なっ!？」

——距離を取った筈のフェイトの目の前に、天鎖斬月を振るうシグナムが現れた事で。

その天鎖斬月を辛うじてバルディッシュで受け止める……が、半秒足らずでバルディッシュが展開した障壁に、何かが衝突する。障壁が展開されている場所は、自分の左脇。何が起こっているか理解できないフェイトだったが、その目が大きく見開かれた。

「う……そ……」

少女の目に映っているのは、天鎖斬月を持ったシグナム“達”だった。何が起こっているか理解できない……だが、少女の頭脳が何とか答えを導き出す。

（残像っ!？ それもこれだけの数を……しかも、魔力を使ってない!？ そんな事、あり得ないっ!？）

少女の混乱も無理はないだろう。何せ、自分を上回る速度を叩きだしているにも関わらず、一切の魔力反応を感知できないのだから。

そんな少女の混乱を気にも止めずに、シグナムは一気に少女を攻め立てる。天鎖斬月を叩きつけ、少女に防がればまた別な場所に叩

きつけ、それが防壁に阻まれたのなら、さらに速度を上昇させながら天鎖斬月を振るった。

少女がこの猛攻に耐えられているのは、一重に自分のデバイスがギリギリのラインで防壁を自動展開してくれているからだ。それがなければ、少女はとっくにやられていた。

――しかし、その行動は数秒も持たなかった。

「はあっ!!」

「くうっ!？」

ほんの一瞬、少女の集中力が途切れ、その動きが少しブレたところに、シグナムの蹴りが少女の右脇腹に直撃したのだ。

直撃したのは普通の蹴り。しかし、こんな超速の中で繰り出された蹴りだ。普通の威力な筈がない。

少女の体は簡単に吹き飛ばされ、近くのビルに叩きつけられた。幸い、装甲が薄いとはいえバリアジャケットを纏っていたので、大したダメージにはならなかった。しかし少女にとって、そんな事は慰めにもならない。

相手は自分よりも遥かに格上。自分の得意とする筈のスピード勝負では話にならない上に、相手はまだ全力を出しているようには見えない。

……勝てない。私はこの人には勝てない。そんな考えがフェイトの頭を過るが、それを振り払うかのように術式を展開し始める。

私は敗けられない。大好きな母の為にも、絶対に。少女は自分が今最短で術式を組めて、なおかつ威力の高い術に自身の魔力を込めるだけ叩き込む。

最大術でなくていい、今の僅かな時間で彼女の防御を越えられるだけの術を行使する。そして、防御を越えた瞬間を狙って一撃で撃破する。それしか方法はない。

「撃ち抜け、轟雷ッ!!」

『Thunder Smasher.』

術式の展開完了と同時に、少女は自身の持てる全て出して、一気に急加速。彼女の居る高度に到達した瞬間、強引に急停止をかけ——バルディッシュを横風ぎに振るった。

「サンダー……スマッシュャー——!!!!!!」

シグナムに向かって放たれたのは、巨大な魔力の雷撃。轟音をならしながら、その圧倒的な筈の雷撃がシグナムに迫る。

そうだ。圧倒的な筈なのに……シグナムは全く顔色を変えない。それどころか、一切逃げるつもりもない。

「その心意気はよし——しかし、次からは自分の力量を弁えてかかってくるのだな」

その瞬間、シグナムの持つ天鎖斬月から魔力ではない何かが溢れる。

シグナムが天鎖斬月を両手で持ち、構える。それだけの動作なのに、とても美しい、とフェイトは思えた。

「月牙——」

シグナムが轟音の中でも、なぜかはつきりと聞き取れる声で言う。ただそれだけで、溢れ出る何かが力を増す。

この時点でフェイトは分かっていただろう。自分では勝てない、と。それでもまだ、諦めずに雷撃に魔力を込める。

ついに渾身の雷撃がシグナムに到達しようか……その時に、彼女は天鎖斬月を振り下ろした。

「——天衝ッ!!」

放たれたのは、斬撃“そのもの”。天を衝く月の牙が、雷撃を食らい尽くす。

放たれた白い斬撃は雷撃と衝突——その刹那、斬撃は雷撃をいとも簡単に押し返し、

「母……さん……」

その勢いのままにフェイトを飲み込み、意識をも簡単に刈り取った。決して、彼女達が弱い訳ではなかった……しかし、相手が悪すぎた、と言っておこう。



「もしもし。どうした、父上？」

『うむ。久しぶりだな、斬月』

場所は変わり、なのは達の地球からすれば異世界、ミッドチルダ。そして、そんな場所で電話に出ているのが彼——ミッドだとかかなり有名な家系の現当主、斬月だ。

彼の言葉から分かるだろうが、電話の相手は彼の父親だ。……察しの良い斬月は、何かまた面倒事になっているのだろう、と思い自分が訊きたいことを先に言った。

「先に訊くが父上。あのじゃじゃ馬がどこに行ったか、分かったのか？」

『いや、まったくだ。まあだが、三本の内、二本の『天鎖斬月』……さらには『千本桜』と『神鎗』。果てにはあのじゃじゃ馬の『氷輪丸』まで持ち主を見つけたとは……かなり異常と言えるな』

二人の会話から分かる通り、斬月の家系は様々な刀を受け継いでいる。

その中でも、天鎖斬月は家系の中でもかなり特殊な刀であり、家系に伝わる刀としては代名詞と言った感じで扱われるが……他の刀も十分に特殊である。

そもそも、デバイスと違い機械ですらない刀が、人格を持っているのだ。特殊でなければ何なのだろう？

まあ、斬月の父親が異常と言っているのはそこではない。一世代にここまで継承者が現れる、それが異常と言えるのだ。

「しかも、持ち主が分からない『氷輪丸』以外は全て私の知り合い」

『ああ。そして、残った最後の『天鎖斬月』。すでに蒼天の持ち主が現れている……これはもしかすると――』

『お父さんの……バカああああああああっ！！！！！！』

唐突に電話から響く、よく知る叫び声。電話からでも十分に響くその声に、思わず斬月は携帯を耳から離してしまう。

まあ彼の予想通り、また変な面倒事になっているな、と思わず頭を抱える斬月。

『うおっ！ な、じゃない。ぎ、斬月！！ 早く帰って来てくれっ！ 私ではどうにも――まてまて！！ フライパンは投げる物ではないだろう！？』

『バカバカバカバカバカっ！！ お父さんのバカあああああああ

あああああつつ！！！！！！！』

「ああ、分かった。出来るだけ、早く戻るようにする」

もはや、聞こえていないだろうと思いながらも、斬月はそう言っ
て電話を切った。

全く、あれが自分の妹だと思うと……ついでは言えば、どこも私に
似ていないしな。

因みに、彼は容姿は父親似、性格は母親似。彼の妹はその真逆。似
ていないのも当然と言えた。

さて、家の為にもさっさと解決しなければな。そう思い、彼は再び
足を進める。

——歪んだ物語の中で、一つの街に刀の継承者達が集結しているこ
とを……まだ彼は知らない。そして、彼と最後の一人が揃う時に何
が起こるのか——まだ、誰にも分からない。



「はあ……」

先ほど話していた刀の継承者、その中の一つ『千本桜』の継承者である彼、ヒナギクはため息を吐いていた。

昨日の夜のいざごさは――別に小さくはないが、軽く解決した。あの二人も、適当に軽いバインドで縛って置いたので、意識を取り戻したら勝手に解けるだろうから心配ない。

いつも彼に付き添っているシグナムは、ただいま彼の弟子であるなのはが、とあるアイドルのライブに行くための付き添いで居ないのだが、彼のため息の理由はそれでもない。

彼のため息の理由、それは――

「ちょっとまってよ！！ 俺たちと遊ぼうぜえ！！」

「ああもう！！ 貴方たちみたいな人、私の好みでもなんでもないのよっ！！」

絶賛、真っ昼間のナンパ風景に遭遇中だからである。状況的には、色的には珍しい緋色の髪をした少女が、男二人に追い掛けられている。

それだけなら、別にヒナギクはスルーしていくつもりだった。あの少女、身体能力的には問題なく逃げ切れそうだし。問題は……彼女足を怪我してるんですよね。

詰まるところ、怪我をしている少女をスルーできる程、彼は薄情ではないという事だ。

持ち前の身体能力を生かし、少女と男の前にあっという間にヒナギクは立ち塞がった。

「お、なんだいお嬢ちゃん。キミが俺たちと――」

「……今すぐボコボコにされてゴミバケツに放り込まれるか、もしくはボコボコにされて警察に放り出されるか――どっちがいいですか？」

「「ど、どっちも遠慮させていただきますっ!!」」

言われた瞬間、男二人はあっという間に退散してしまった。

まあ、誰から見ても冗談に見えない表情だったので彼らの判断は正しかったと言える。っていうか、引かなかったらマジでヒナギクは実行しただろう。彼は、案外DSである。

「大丈夫？」

「あ、うん。ありがとう……」

男二人を軽く撃退したヒナギクは、後ろを向いてペタンと座り込んでいた少女の手を取って立ち上がらせて上げた。

（全く、何でナンパなんかするんだか……私は男ですけど、未だにそういうところが理解できないんですね）

少女を立ち上がらせながら、そう思ったヒナギクだったが、何故か少女が急に啞然とした表情になり不思議に思った。

「どうかした？」

「え、ううん。何でもない！　そうだ自己紹介！　あのね、私は――」

ほぼ同時刻、シグナムとなのはは海鳴の一番大きいドームに向かって歩いていった。目的は、そこで予定されているアイドルのライブだ。そういえば、誰のライブか訊いていなかった、と思いシグナムは嬉しそうにスキップしながら歩くのはに訊く事にした。

「なのは。一体、誰のライブを見に行くのだ？」

今、運命の齒車が……

「あ、そういえば言ってませんでしたね！　――藤原ふじわら 雪華ゆきかさん」と、雪ちゃんのライブですよ♪」

「私は藤原 雪華！！　よろしくねっ♪」

――カチリと噛み合い、ゆっくりと動き始める。また、物語がさらに加速を続ける……。

第4話（後書き）

Q オイ、また新しいの出てきたぞ。

A. 13kmや。

Q 錯覚だ。

A. なん……だと……？

てな感じで、また新しく引っ張ってきてしまいました。あと、いまさらな感じで言っておきますが、もうこれ以上は引っ張ってきません。

今回話に出てきた物で、一応予定上は全てです。しかし……また趣味全開な刀が揃ったなあ（↑お前の所為だよ） さて、次回辺りで一本以外の刀の持ち主が判明する……かな？（オイ）

では、感想や意見等をお待ちしています！！ 次回をお楽しみに！！

第5話（前書き）

第5話、完成しました。今回は雪華編の前半戦です。それと
忘れてましたが、雪華もシグナムと同じヒロイン格だったり（え

第5話

「へえ、ヒナギクって言うんだ。男の子なのに、珍しい名前だね？」

「まあよく言われます……あれ？」

自分の自己紹介を終えて、自分の名前の感想を言われて普通に返してしまったが、唇に指を当てて彼は雪華の言葉に疑問を感じる。

——私、男だなんて言ってないですよね？

少なくとも、自分の性別を一撃で見抜いた人なんて今まで一人もない。珍しいのレベルじゃないですね……と、それほど他人に興味を持たない彼にしては珍しく、少女に興味を持った。

「どうしたの？」

「ううん、何でもないですよ。それより、どこか行く予定とかだったんじゃないんですか？」

「——ああっ！！ 変なのに追い掛けられた所為でもう時間だよ！
！ どうしよう……足の怪我があるから、これ以上無理をするわけにもいかないし……」

どうやら、先ほどの男二人にかなりしつこく追い掛けられていたらしく、右足の怪我が悪化してしまったようだ。

彼女の仕事上、これ以上足の怪我を悪化させる事はできない。どうしようか迷っている雪華に、何かを考えていたヒナギクが質問をする。

「あの、目的の場所って走れば間に合いますか？」

「う、うん。今から走れば……」

「じゃあ、私が貴方を背負って行きますよ」

「へ？ い、良いの？」

雪華の言葉に含まれるものは、恐らく初対面なのにそこまでお世話になっていいのか……と言う感じだろう。が、ヒナギクがそんな事を気にする筈がない。

「良いですよ。どうせ暇でしたから」

「じゃ、じゃあ遠慮なく……」

雪華がヒナギクの背中に乗り、ヒナギクも手慣れた様子で彼女を背負う。まあヒナギク的には、お姫様抱っこの方が楽なのだが……理由としては、楽なの以外にも彼女のふくよかな胸が背中に――

「――いま、エッチな事考えてたでしょ？」

「……さ、さあ。何のことですか？」

考えが読まれた事を誤魔化すように、ヒナギクは一気に走りだした。

この子かなり鋭い。下手に変な事は考えられないらしい——まあ、単純に鋭いだけではないのだが……。

と、言うわけで走ること20分くらい。二人がたどり着いた場所は海鳴市で一番大きいドームだ。

そこには、グッズを買ったりなどしている人がかなり居て、デカデカとドームの入り口に取り付けられた看板は、ヒナギクが背負って来た少女の仕事を知るには十分な物だった。

「雪華ちゃんって、アイドルだったんですね……」

「ん、まあ一応ね。とりあえず、はいこれ」

「ふえ？」

ヒナギクの背中から降りた雪華が、彼にさらっと何かを手渡した。それを見ると、首に掛けるタイプの通行証らしい。

「何かお礼したいから、一緒に中に入って待っててくれる？ ついでに私のライブも見れるから♪」

「私は別にお礼なんて……」

「良いから良いから、早く行きましょ！」

ヒナギクが遠慮する暇もなく、雪華が彼の腕を取ってずんずん引張って行ってしまう。遠慮しようと思ったヒナギクも、どうやら雪華の勢いには逆らえないらしい。まあ彼自身、彼女に興味を持っているのでやぶさかではないのだが。

二人揃って会場の裏口から入ると、そこは大勢のスタッフが居て、準備の真っ最中のようなのだ。そのスタッフの内の一人に、雪華がためらいもなく話し掛けた。

「すみません、遅れましたっ!!」

「おお雪華ちゃん。まだ大丈夫だよ……ってそっちの子は？ 見ない顔だけど」

「あ、彼は――」

「初めまして。新しく入った、雪華ちゃんの手伝いの者です。今日はよろしくお願いします」

雪華が何かを言う前に、ヒナギクがとんでもないことを言っただけで遮った。

その発言に驚いたのは、勿論のこと雪華だ。手伝い何てさせる為に、彼をここに呼んだ訳ではないので当然だが、スタッフは疑うことなく、そうかそうか、じゃあよろしく頼むよ!! 何て言っただけで準備に戻ってしまった。

「ちょ、ちょっと! 私に別に手伝いなんて頼んでないよっ!」

「良いんですよ。どうせ暇ですから」

そう言っただけで、ヒナギクはあっという間にスタッフに混じって手伝いを始めてしまう。それを見ながら、雪華は大丈夫かなあ、何て心配になってしまったが……その心配は良い意味で裏切られた。

「おいキミ、こっちも頼むー」

「キミキミ、こっちも頼めるかい？」

「はい、よろこんで♪」

一体どこでこんなスキルを修得したのか——まあ本人にも分からないが——凄まじい働きを見せて、ヒナギクは絶賛大活躍である。

そんな平然と手伝いをこなすヒナギクだったが、何か奇妙な視線を感じていた。何が奇妙かと言えば、別に悪意のある視線でもなく、何かを見極める様な物……加えて、人ではない何かの視線だ。

彼が集中して気配を探ると、やはり人とは違う気配を感じる……そう、自分の千本桜が具象化した時と同じ気配だ。まあ、別に何かする訳でもないらしいので、放っておいても平気だろう、と彼は手伝いに集中する。

「アイツ……俺の気配を感じとったのか？」

奇妙な視線の主。その人物は天井の柱の上に立ちながら、決して小さくない驚きを見せていた。

背は九歳程度の子どもと同じくらいだが、銀髪で翡翠の瞳に少し長めの刀を背中に背負って居るため明らかに普通の子どもではない。

「凄いやろ？ あの子、ボク達の気配も正確に解るんよ」

「——げ……何でてめえがここに……」

少年が振り向くと同時に、かなり彼の表情が嫌そうに変わった。いつのまにか彼の後ろに居たのは、一切の濁りがない真っ白な服を身に纏って、その糸目と薄ら笑いの様な表情からは恐らく親しい者でしか考えを読み取れない……そう思わせる人物だった。

その人物は、ゆったりとした動きで柱に座り、大きな袖に手を入れて漸く口を開いた。

「何や、久しぶりの再会やのに、その反応は酷いなあ」

「俺はてめえに会いたいとは、微塵にも思ってたからな」

彼らの関係は、かなり親しい関係のようだ。少年の方は憎まれ口を叩きながらも、どこかその表情は穏やかで、薄ら笑いを浮かべている彼もどこか楽しげだ。まあ言うなれば、腐れ縁と言う感じか。

「で、アイツ一体何者だ？ 気配を殺したのに、アイツは正確に感じ取ってきた。こんな事、俺たちそれぞれの主じゃねえと普通は無理だ」

「単純に関係だけなら、ボクの可愛い主の師匠や」

「――実力は？」

少年の問いに彼は自分の目を少し開き、その少年からはほんの少し見え程度の、しかし鋭く光る深紅の瞳で少年を見据えながら、言う。

「本気を“出せるんやったら”、しらかわ白河家の当主様でもない、あの子とまともに戦う事も出来へんやろうな」

「なるほど……な。天鎖斬月の所有者で、やつとか」

「それも、完全に使いこなせんとアカンからなあ」

「……とりあえず知りたい事は分かったが、お前いい加減そのエセ京都弁やめろよ」

少年によっていきなり話が切り替わり、二人の間に流れていた静かな空気が霧散する。彼もそれに合わせるように、再び糸目になり笑みをこぼした。

「ボクは気に入っとるんやけどなあ。キミこそ、主の記憶使わんとその姿やない」

「それはお前も同じだろうが。俺達と同じく、資格者を見つけた他の三人はどうなんだよ？」

「んー、みんな自由気ままにやっとるよ。まあ、姿が変わっとらんのは、ボク達くらいなもんやけどな。ああ、そうそう、新しい子も増えたんよ。もうえらいツンデレさんでな」

「何だそりゃ？ ……俺はもう行くぜ」

訳が分からん、と言った風な少年だったが、何かを感じ取って青年に背を向ける。

「あらら、もしかしてあの変な石を拾いに行くん？」

「ああ。俺の主の仕事をあんなくだらないもんに、邪魔させる訳にはいかねえしな」

「主思いなんね」

「……………うっせ」

瞬間的にその場から居なくなる時、少年の顔が耳まで真っ赤になったのは気のせいではないだろう。事実、青年の方は面白いものを見た、っていう感じの表情だし。

因みに青年の方は、さてさて小さな主さんの場所に戻ろうか……やっぱり、もうちょい探検しよか、とか思っている辺り、主を困らせるくらい自由人だったりする。

時間は過ぎ去っていく、あっという間にライブ開始の直前。ステージの裏側では、当然だがもう既に雪華がスタンバイしていた。……そんな雪華を心配して見つめるのは、ヒナギクだ。

「ん、どうしたの？」

「……足の怪我、大丈夫なんですか？」

「へーきだよ。それじゃ行つて来るね——ヒナ」

ヒナギクに見せたのは、誰もが見惚れるだろうとびっきりの笑顔。それは……ヒナギクとて例外ではなかった。

始まったライブ……その空気に、ヒナギクは一瞬にして吞まれた。

「みんなー！！盛り上がって行くよー！！！！！！」

〈おおおおお おおおお おおつ!!!!!!〉

素人でも分かる、これが本物かどうかなど。一瞬にして観客を魅らし、足の怪我など全く感じさせない動き。

ヒナギクは雪華から目が離せなくなる、何も言えなくなる、ここま
で女の子相手に見惚れてしまうのは……まあ、シグナムが現れたと
き以来と言った感じか。

そんな魅入られたヒナギクを元に戻したのは——彼にとっては不快でしかない物だった。

何かが弾ける様な感覚、ジュエルシードの発動だ。しかし、ヒナギクにとって重要なのはそこではない。

ジュエルシードが発動した瞬間、ほんの少しだが雪華がそれに反応した、それが彼にとっては重要だった。

（あの子……ジュエルシードの発動に気付いてる）

それに気が付いたヒナギクの行動は早かった。発動したジュエルシードの数は、全部で三つ。距離は三つそれぞれ近い場所に在るが、個別の発動らしい。

瞬時に術式を組み、結界を展開する。そして、発動した場所に向かって一氣に走りだした。

同時刻、ジュエルシード発動を感知したのが走る。一緒に来ていた筈のシグナムがいない理由は、なのはが無理やり置いて来たからだ。緊急時の為にとか、無理な理由をつけて。

「っていうか、本当にもう一つの方は心配ないの？」

「へーきや。ボクの知り合いが、ちょうど近くに居るんよ」

なのはの隣を走る、糸目の青年が確信があるといった風に言う。なのはがシグナムを待機させた理由の一つは、彼女の隣を走る青年が人手は足りている、と教えてくれたから。

もう一つの理由……これは自分の師が望んでいる事だから、今は関係ないだろう。

「なら良いけど。まあ今回は早く済ませたいから、お願いできる？」

「ハイハイ。了解や」

言うなり、青年の姿が消えた。その代わりなのだろうか、なのはの服装が青年と同じ真っ白な服に――違いは大きさくらい――なり、服の腹辺りには脇差の様な刀が差してある。

服装が変わったなのはは、さらに走る速度を上げた。それと同じ時、既にヒナギクはジュエルシード暴走体と相対していた。

相手は、ジュエルシードを取り込んだ巨大な鳥……怪鳥だ。それが通常の魔導師より遥かに速い速度で飛翔している――そう、通常の魔導師ならば、かなり苦戦するだろう。通常より速い魔導師、例えばシグナムと戦ったフェイト・テストロッサならば、多少の苦戦程度だろう。

ならば……ヒナギクが苦戦する道理など、どこにもない。彼が手に

持った刀の刃が、散って行く。

舞い散る千の刃、それら全てがヒナギクの背に集まり、型を成して行く。

それは桜色の翼となり——一瞬にして“純白”に変わった。一對二枚の純白の翼……ヒナギクの姿は、まるで天使を思わせる程に美しい。

「行こっか——『千本桜』」

場所は変わる。なのはが相對している暴走体は、ヒナギクが相對している暴走体とほぼ同じだった。恐らく、揃ってジュエルシードを取り込んでしまったのだろう。

まあこの程度の速度なら、彼女のデバイスを使えば問題はない。が、なのははそこまで時間をかけるつもりは毛頭なかった。

少女が脇差サイズの刀を抜き、それを上空の怪鳥に向ける。それだけで、もう終わるのだ。

「射殺せ——『神鎗』」

再び場所は変わり、最後の一体のジュエルシード暴走体。それは、一本の樹がジュエルシードを取り込み、言うなれば意思を持った樹木の化け物、といったところだ。

そんな暴走体の前に現れたのは、全く恐れの見えない少年……糸目の青年と話していた彼だ。

「悪いな。生憎、俺の主は仕事中だ。さっさと終わらせてもらうぜ」

少年が背中中の刀に手を掛けると、刀の鞘が消えて少し長めの刃が露になった。それだけなのに、暴走体が何かを恐れる様に、少年に向かって無数の根を使って攻撃しようとする。

だが、遅すぎる。冷気が溢れ、全てを凍り付かせる力が、解放される。

「霜天に坐せ——『氷輪丸』」

勝負は全て一瞬で終わった。

切り裂き……貫き……凍り付く。言葉にすればそれだけ、しかし本当にそれだけで戦闘は終結した。



「今日はありがとね。おかげで助かったよ」

「ううん、私は何もしてないから」

観客の知らない場所での三人（？）の活躍により、雪華のライブは大成りに終わった。まあ、今は片付けなども有り夜遅くになってしまったので、女性一人では危ないとヒナギクが雪華を送っているという訳だ。

と、突然ヒナギクの隣を歩いていた雪華が走り、彼の目の前で振り返り止まった。何事かとヒナギクは問いかけようとして……雪華の笑顔で上機嫌な言葉に、完全に固まったしまった。

「ねえねえ、ヒナ。……私とデートしない？」

「……………はい？」

出逢いの形なんて、全部唐突だ。恋の始まりだって、全部突然だ。他者から見れば三角関係に見えることだって、多分いきなりだ。

つまりはまあ、そういう事なんじゃないの？　まるで関係のない様な出逢いでも、物語は止まらず加速を続けるってことだ。

第5話（後書き）

前書き通り、とりあえず前半戦が終了しました。あと、無印編もこれで中盤くらいかな？ もともと、無印編でやる必要が有るのって、プレシアさんの話と主要人物の紹介みたいなもんですしね。

さて、今回ぶっちぎりヒロインな雪華ですが、シグナムがヒナギクとしての主人公なら、雪華はヒナギクにとつてのヒロイン。詰まるどころ、ヒナギクは主人公とヒロインをどっちもこなします（笑）

まあ正直に言えば、別作品の時空の双剣士のリメイクですからね、烈火の翼って。ヒナギクが目立つ為には、実はこうするしかなかったりww いや、やらないとシグナムがアホみたいに目立ちますしww

さて、いつも通り感想等々をお待ちしています。ついでに、今回は気が向いたので（オイ）次回予告！！

次回の烈火の翼は！！

「シグナムさん、気になるなら詳しく訊けばよかったのに……」

「はっはっは、何を言うんだのは——気になってなどいないさ、絶対！ 気になってなどいない！！」

「キミ、それ気になっとなって言うてる様なもんやで？」

「てか、怪し過ぎだろ俺達……」

次回、『アイドルとのデート！？ 尾行はお静かに！！』

「生憎、俺の主は絶賛デート中だっ！！ 速攻でケリつけてやるぜっ！！」

「……キミ、この前より気合い入っとらん？」

「最初に言っておく——今日の私は、大変機嫌が悪いっ！！」

「別名、八つ当たりとも言います♪」

お楽しみに！！

第6話（前書き）

第6話、完成しました。さて、今回は予告と違う箇所があります
が……ごめんなさい、予想以上にシリアスになって食い込めなかつ
たww

今回は長くなりそうだったので、前半戦です。では、本編をお楽し
みください！！

第6話

……果てない空。どこまでも続くとも思える、美しい空。そんな空が夕焼け——赤音色に染まっている。見る人によっては、美しいと思えるそれだったが、背を向け合う一人の少年と一人の少女にとっては、まるで世界の終わりを告げるような風景。

——二人の世界が終わりを迎える。

「ねえ、黒崎くん」

「……なんだよ」

互いに背を向けた状態でも、自分の声に彼はぶっきらぼうに応えてくれる。彼はぶっきらぼうだけど、自分は知っている。そんな彼の優しさを、純粹さを。

……だからこれは、自分のささやかな願い。きっと、これくらいは叶えてくれる筈だから。

——これは夢。彼の記憶に刻まれた“ユメ”。忘れる時など永劫ないであろう、彼の中に納められた『永遠の愛』

「名前で……呼んでも、良いかな？」

「何回、同じこと言わせんだよ？ 俺は何度も名前で呼べって言った。知ってんだろ、俺は同じことを何度も言うのは……嫌いなんだよ」

……そんな願い、幾らでも叶えてやる。だから、そんなに悲しそうに言うんじゃないよ。

二人は心が繋がっているかのように、思考の中でも会話をする。お互いに分かっているかは定かではないが、お互いがどんな表情をしているかくらい、二人にはもう分かっているのだろう。……しかし、そんなものは慰めにもならない。

柵に寄りかかった少女が、少年の応えに顔を綻ばせた——その瞳から、涙を流しながら。

「そっか。ありがとう、私のわがママを聞いてくれて」

「この程度、わがママの内に入らねえよ。もっと大きな願い持ってきて、幾らでも叶えてやる」

少年は今すぐにでも振り返り、そして少女を抱き締めたかった。けど、それは少女の願いから外れることだから、出来ない。

少女は今すぐにでも振り返り、少年の向かって駆け寄りたかった。けど、そうしてしまうと、自分の泣き顔を見せてしまうから、出来ない。

——でもね、私の一番の願いは……もう叶ってるんだ。

「大きな願いかあ……デートがしたかったな。一緒に買い物したり、映画を見たり、他にもいろんな事を——したかったよ」

「ッ……!! したかった、じゃなくてするんだよ!! 何度言

えば分かるんだよ……俺は、同じこと言うのが嫌いなんだっ!!!
! だから……だから!!」

何を言いたいのか、それは少年自身にも分からなくなっていた。
けれど、その瞳からは少女と同じく涙がとめどなく溢れていた。

認めたくなかった、終わりなど信じたくない。だが、それはもう間
近に迫る真実——ユメは終わりを告げる。

少女が振り向く、少年も振り返る。そして……少女が紡ぐ言葉は、
ずっと少年に伝えたかった言葉——しかしそれは、ユメに終わりを
告げる言葉にもなった。

「さよならだね……大好きだよ——裏月くん」

それは、彼が一番聞きたかった言葉であると同時に、決して聞きた
くはなかった言葉。両立できない願い、二律背反。

彼が悲しみと引き換えに得た物は——

「また……この夢か」

目を覚ました彼、裏月が放った第一声はうんざりした、という感じ
のニュアンスだった。もう何度目になるだろう? そう思っても、
裏月は忘れることなどできない。いや、忘れることなどしない。

あんな夢を見せられてしまうと、当たり前だが目が覚めてしまう。
で、彼が起きてリビングに行く……さらに目が覚める光景を目に

することになった。

「あ、裏月さん。朝ご飯できてますよ」

「……ああ。サンキューな」

因みに、時刻はまだ六時半。いくらゴールデンウィーク真っ只中とはいえ、小学生がこの時間に起きていて、尚且つ人の家で朝ご飯を作る時間ではない。

だが、忘れてはいけない。少女、高町　なのはは“自称”、平凡な小学3年だ。自称の部分を強調するのは、もちろん本人の自称ではないので、平凡な小学生は伸びる刀を持っていたり、科学の延長上とはいえ魔法を使えたりしないのでご注意を。

少々の間固まってしまった裏月だったが、休みの日はいつもこうだったな、と行動を再開した。まあ彼が行動を停止した理由は、今日なのはが来ているとは思っていなかったからだ。

二人はいつも通りと言った感じで、食事をしながら会話をする。

「なのは、お前士郎さん達の温泉旅行に着いて行かなかったのか？」

「その予定だったんですけどね。ちょっとした予定が入ってしまいました……裏月さんは？　いつも通り情報集めとかですか？」

「……いや、今日はゆっくり散歩でもする事にした」

あんな夢を見た後では、確実にことに身が入らないだろう。だって、散歩していた方がまだ有意義だ。何なら、真子達しんじを呼んでも良

いかもしれない。そんな事を考えていた裏月だったが、ふと思った事を口に出した。

「そういやお前、士郎さん達との旅行を断るって、いったい何の用事だよ？」

「うーん、何というかまあ……師匠のフラグ乱立の影響？」

「は？」

まあ、なのはの言葉は強ち間違ってもいない。彼らの朝ご飯から約3時間くらい、天気はゴールデンウィークの連休に相応しい晴れ模様。

そんな外出にぴったりな日に、二人のデートは決行された。

「あ、ヒナ！ ごめん、待った？」

「全然。それに、まだ待ち合わせ時間より前だから……？」

「どうかした？」

「あ、ううん。じゃあ行こうか」

デートに定番な感じのやりとりをした二人が、予定を決めていたのか迷う事なく並んで歩き出す。その会話の間に、ヒナギクが何か違和感を感じたようだが、雪華が居るので深く探ることはしなかった。

さて、このヒナギクの違和感の正体は……後方、約五百メートルの地点にあった。

「あの子、今こっちに気付きかけたんちゃう？」

「ん、やっぱり五百メートルくらいがギリギリの距離だね。これ以上近づくと確実にバレますよ、シグナムさん」

と、なのはは隣に立つポニーテールの女性に言葉をかけたが、女性の方はなにやら微妙な表情で五百メートル先——正確にはここは、五百メートルと六百メートルの境目くらいなのだが——を見ていた。それを見たなのはが、呆れた様な表情になりながら言った。

「って言うかシグナムさん、気になるなら詳しく師匠に訊けばよかったのに……」

「はっはっは、何を言うんだなのは——気になってなどいないさ、絶対に！ 気になってなどいない！！」

「キミ、それ気になっとるって言うてる様なもんやで？」

「てか、怪し過ぎだろ俺達……」

的確なツッコミありますがとうございます、と言いたくなる様なツッコミを入れたのは、糸目の青年と一緒に居る少年。なぜ少年までこんな尾行に付き合っているかと言えば、自身の主の“初”デートを見たかったからだ。もっと詳しく言えば、いい加減、彼氏の一人くらいつくんねえかなあ、とか思っていたりする。

そしてシグナムは……あまりにもそわそわしたシグナムを見たなのはが、じゃあ尾行でもすれば良いじゃないですか、という発言をマ

ジで実行したからである。ついでに言えば、なのはヒナギクにさ
らっと雪華のサインを頼んでいるあたり、まったく抜け目がない。
さらに言えば、デートの情報元はなのはだ。流石（？）はヒナギク
の弟子である。

こんな感じで尾行をする四人はさて置き、裏月は普通に道を散歩し
ていた。その歩く道の下にあるグラウンドでは、子ども達が元氣よ
くサッカーをしていた……が、裏月の目に入ったのはその光景では
なかった。

道と草木の坂のギリギリの場所、そこに居る車椅子の少女が目に入
っていた。茶髪のショートヘアに変わった髪止めを使っている、
車椅子に乗った少女。そんな少女の視線の先は、サッカーをしてい
る少年達。その視線に込められた物は……憧れなどの感情だと裏月
には思えた。

「げ……」

いきなり裏月がうめいたのは、少女が車椅子をさらに押したから……
先ほども言ったように、少女が居る場所は坂の境目ギリギリの所
だ。そんな所で車椅子を進めれば――

「ひゃ!!」

当然、車椅子の少女は坂にはみ出して落ちる。あらがうすべを持た
ない少女は、重力に従って落ちるしかない……と思われたが、少女
の車椅子が突然停止した。

「……へ？」

「お前、バカか？」

「あ、あははは……」

車椅子を片手で掴んで止めた人物、裏月が少女に遠慮のない言葉をぶつける。一応、言っておくが、裏月と少女は初対面である。それでも遠慮なく言葉をぶつけるのは、裏月の性格ゆえなのか単純に呆れているだけなのか……まあ両方と言ったところか。

こんな微妙な出逢い……だがこれも、歪んだ運命の中での出逢い。そして、彼と悲しみに泣く彼女が出会うのは——そこまで遠くないのかもしれない。

同時刻、その出逢いに呼応するかのように鎖で縛られた一冊の本が震え出す……いや、本だけではない。本の有る部屋の外の庭、そこに落ちている青い宝石が輝き出した。

宝石が光りを纏い、形を成した。それは一人の女性の形——シグナムと瓜二つな女性の形に。普通と違うのは、全身が黒く染まっていることだろう。言うなれば、影が形を成したか、まるでデータの欠片の様な……。

その目の前に、一本の片刃の長剣が浮かび……迷わずそれは長剣を手に取った。

その瞬間、彼女——シグナムは異変を感じ取った。

「っ！ ……なのは、後は任せた！！」

「は？　ちょ、ちょっとシグナムさん！？」

突然走り出したシグナムに反応して、糸目の青年に後を任せながら、なのはは彼女を追い掛ける。初動の反応が良かったお陰で、何とかシグナムに追い付き言葉を放った。その間も、二人は走ることを止めない。

「ちょっとシグナムさん！？　いきなり、どうしたんですか！？」

「……なのは、結界を張ってくれ。戦闘に支障をきたさない程度の大きさでいい。何かが……近づいて来る」

「――分かりました」

何か釈然としないのはだったが、シグナムの表情を見て冗談ではない事は分かるので、素早く結界を構築した。結界で包まれた空間から人が消えて、シグナムとなのははしなくなる。それとほぼ同時に、シグナムが立ち止まった。

立ち止まった場所は、もともと人通りは少ないが、狭くはない場所だ。そんな場所の道路のど真ん中で立ち止まったシグナムの前に……何かが舞い降りた。

降り立った者の姿を見た瞬間、なのはは息を呑み、シグナムは表情をさらに陰しくした。

「あれは……」

「シグナムさんと……瓜二つ」

シグナムの前に降り立ったのは、青い宝石が構築した影だったもの。先程と違うのは、完全にシグナムと瓜二つになっていることだ。違いは、手に持った長剣と、その身に纏った騎士服と……感情が見られない表情のみ。

そんな自分と同じ容姿の相手を前にして、シグナムは一步前に出て手に卍型の鐐をした短刀を握る。

「下がっている、なのは。私がやる」

少女の応えを聞く前に、シグナムは短刀を斜めに振り上げ、告げる。

「煌めけ、天鎖斬月」

瞬間、シグナムを白い奔流が包み込み、そしてシグナムが奔流を斬り払うかのように刀を振り下ろした。

払われた白い奔流から見えたシグナムの姿は、巫女服を纏い白い卍型の鐐をした長刀、天鎖斬月を手にした姿に変わっていた。その姿を後ろから見つめるなのは、このままシグナムに任せて良いのだろうか？ という考えが頭をよぎっていた。

シグナムには謎が多い。まず、なぜヒナギクの下に現れ、そしてヒナギクの騎士を名乗っているかすら分かっていないのだ。本人の記憶も曖昧だし。

分かっている事と言えば……シグナムの身体が普通の人間と全く変わりが無い、という事だろう。人と同じように髪は伸びるし、お腹だって空く。というか、彼女は常人より多く食べる。

それくらいしか分かっていないシグナムだが、信頼できる人物だということとははっきりしていた。だから、その彼女が言うのだから、この場は任せよう、となのはは巻き込まれないように下がった。

長刀と長剣を構え、相対する二人……しかし、次の瞬間シグナムが動いた。凄まじい速度で動き、相手に向かって天鎖斬月を振るう。速度は天鎖斬月を持ったシグナムに分がある……しかし、相手はシグナムの反応速度までも再現しているのか、それに合わせて長剣を振るった。

それにより、刀と剣は衝突し、鐺競り合いになる——そう思われた。だが、それは間違いだった。衝突して辺りに衝撃波が起きる、ここまでは予想通り、しかし鐺競り合いになった瞬間……なんとシグナムが押され始めたのだ。

（嘘……天鎖斬月を持ったシグナムさんを押して返してる！？）

戦いを観察していたなのはも、シグナムが押し返され始めたのに気付いて、信じられない気持ちになる。だが、なのはが何かに気付く。

（この感じ……相手はジュエルシードを取り込んでる？ いや、違う。ジュエルシードが、シグナムさんのコピーを構築した？ だとしたら……）

なのはの予想は、見事に的中していた。このままでは弾き飛ばされる、そう判断したシグナムが、一度距離を取るために後方に飛び退いた。標的がいなくなった長剣が、地面に叩きつけられた。

その光景を見たシグナムの目が、驚愕で見開かれた。頑丈なコンクリートに叩きつけられた剣が、いとも簡単にコンクリートの地面に

めり込む。それだけでは済まず、めり込んだ剣がコンクリートを砕き、粉碎する。さらにめり込んだ箇所以外の場所にも罅が入っている。

たった一度叩きつけただけで、とんでもない力だ。なのはの予想は、おそらくどうやってか再現したシグナムの身体能力を、ジュエルシードが引き上げている。だから、このふざけた力が生み出せるのだ。どうやらこの戦い……そう簡単には行きそうにないらしい。

「んじゃ、ここまでだな」

「えー、家の中に入って行かへんの？」

「……お前なあ」

ところ変わって、裏月と車椅子の少女。なんやかんやで、何故か裏月が車椅子を押して少女の家まで送ることになってしまった。警戒心なさすぎだろ、コイツ……と裏月が思ったのは言うまでもない。

で、いざ家まで送ってやるとこの会話だ。来るまでの会話で、両親がいないことは分かっていたが……。

「たく……もうちょっと警戒心を持て、警戒心を。初対面でこれはおかしいだろ、もし俺が悪い奴だったら、お前どうするつもりだよ？」

「うーん、だってお兄さん私のこと助けてくれたやん。それに悪い人やったら、いきなりバカなんて言わないで、もっと露骨に優しくするやろ？」

……コイツ、本当にガキか？　てか、俺の周りは何で子どももつばく
ないガキしかいないんだよ。そう裏月が思ってしまうのも、まあ仕
方がないだろう。何せ、彼の近くには“自称”平凡な小学生　高町
なのはが居るのだから。

普段の裏月なら、何だかんだお人好しな彼なので誘いに乗ってしま
うだろう。が、この家の状況を見た瞬間、彼の思考は別に移ってい
た。

「仕方ねえ、じゃあちよつとしたゲームだ。次にお前と会った時、
もしお前から声を掛けられれば、俺はお前の家に入ってやろう」

「む、さりげなく今回はスルーちゅうわけやな。よーし、絶対お兄
さん見つけてみせるよ!!」

「ま、適当に頑張るんだな」

言いながら、裏月は少女に背を向けてその場を離れた。彼がこんな
条件を少女に出した理由……一つは、この条件なら用事がある時な
どは彼から話し掛ければ良いから。

もう一つは——少女の家に仕掛けられていた結界だ。これは少々特
殊型の結界で、少女とある程度親しい関係でないと家に入る気が起
きない……言うなれば認識阻害魔法に近い感じの結界だ。で、ここ
で生じる疑問。なぜ少女の家にこんな結界が仕掛けられているか、
だ。

少女のあの行動を見るに、少女が結界を仕掛けた可能性は低い。つ
まり、少女もしくは少女が持つ何かを隠すために、何者かが仕掛け
たという事だ。これだけの予想を、裏月は家を見てから少女と離れ

るまでに考えついた。

だからこそ――

「そろそろ、出てきたらどうだ？　かくれんぼする様な歳でもねえだろ」

相手の存在を捜し出す事など、彼にとっては造作もない事だ。これでも、予想以上に時間が掛かったがな、と裏月は心の中で呟いた。ま、絶賛散歩中なのだろう彼の相棒が居れば、もっと早かったのは事実だが。

立ち止まり振り向いた彼の前に降り立ったのは、二人の仮面を付けた人物……恐らく変身魔法か。

「貴様……」

「何で自分たちの存在が分かったか……か？　あれだけ露骨に結界が張ってあったら、誰でも分かるつーの」

いや、それだけで分かるの、裏月さんか斬月さんか師匠くらいなものですよ？　と、さりげなく自分を抜かしたツツコミがなのはから飛んできそうな事を、裏月はいとも簡単に言っただけで済んだ。

その刹那、片方の仮面の戦士が動こうとした。そう、動こうとしたのだ。しかし、動けなかった。

――仮面の二人の間を、圧倒的な何が通った。

「なん、だと……」

動くより早く、光が二人の間を分けた。そうとしか、言いようが無い光の軌跡。後に残ったのは、二人の間を裂くかの様な、斬撃の跡。

「貴様、その刀は……！」

「へえ、こいつを知ってんのか。ってことは、そこそ有名所の使い魔さんらしいな」

彼ら、いや“彼女ら”の正体をあっさり言い当てた裏月の姿は、目を離さなかった仮面の二人が見逃す程の間で変わっていた。

服装は蒼いロングコートにも似た独自の姿に。そして、手には蒼い刀……卍型の鍔、柄頭に途切れた鎖がついた刀を持っていた。

彼が別れ、悲しみ、と引き換えに得た物、それは――

「一瞬たりとも、目え離すなよ。まあ、離す暇なんてやらねえがな。行くぜ――『天鎖斬月・蒼天^{そくてん}』」

闇を崩す、栄光の月剣、つるぎ。これは彼の愛が変わらぬ証――『永遠の愛』の証。

振り下ろす刃は、悲しみと引き換えた栄光――天鎖斬月・蒼天。

第6話（後書き）

……あれ？ デートは何処へ行った？ って感じの6話になってしまいましたww デート次回に描写する……はず（オイ）

さてさて、今回目立った裏月ですが、彼もこの物語における主役の一人です。てか、別作品の双剣士と烈火の少女を見ている人は、りっくんのヒロインが誰かはバレバレ何ですよね（笑）

ここら辺から、無印編のラストまで一気に行きながらAS編の話も混ぜていきます。そろそろ、黒い執務官くんの出番が来そうですね。

いつもの如く、感想や意見等々をお待ちしています。では、次回をお楽しみに！！

第7話（前書き）

第7話、完成しました。何か、今回はやけに時間が掛かった上に、強引に詰め込んだ感じになりました（汗） おかしい、それでも次回に持ち越したんだけどなあ。

さて、今回はタイトル付き！！ タイトルは『出来損ないの魔法使い』です。これが誰を差しているか……それは本編をお楽しみに！！

第7話

別々の場所で展開される、二つの戦い。どちらも結界が展開され、内部では違いがあれども二人の天鎖斬月の所持者が戦闘を行っている。

まあ何が言いたいかと言うと……そんなドが付くほどに派手な戦闘を行ってれば、ヒナギクが気が付かない訳がない、という事だ。

「あ、これなんかどうかな？」

「えー、でもこっちも良さそう何ですよねー」

お前らはどこの女子高生だ、と言いたくなるような会話を雪華と服を選びながらするヒナギクだが、その思考は服だけでなく戦闘の方にも向いている。と言っても、彼自身が戦闘に向かう訳にはいい、ならばどうするか……。答えは簡単、彼の半身とも呼べる刀に頼めば良い話だ。

【さくら。聞こえる、さくら？】

【うにゃ。聞こえるよ、お兄ちゃん】

これは、彼らにしか聞こえない会話。しかし、他の人間が聞けたと仮定すると、驚くところはヒナギクをお兄ちゃんと呼ぶその声が、“自称”平凡な小学生、高町なのはと全く同じ声という事だろう。

ヒナギクにとって、この声は聞き慣れた物……なのだが。

【ねえさくら。やっぱりその“お兄ちゃん”って言うのは……なのはと同じ声で言われると、恥ずかしいというか何と言うか……】

【にやはは、お兄ちゃんはお兄ちゃんでしょ？ それより、ボクは適当に援護に向かえば良いのかな？】

【うん。お願いね、さくら】

【了解だよ、お兄ちゃん】

あ、やっぱりお兄ちゃんは止めてくれないんだ……とか思いつつ、二人は会話を終えた。まあ、彼女がどちらに向かうにしろ、多分これで大丈夫だろう。それくらい、ヒナギクはさくらに信頼を置いていた。それは、当然ながらシグナムやなのはにもだが。

「さて……」

そう静かに呟いたのは、天鎖斬月・蒼天を構えた裏月。呟くなり、裏月は掛けている自分の眼鏡を取り、しまい込む。どうせ、本来掛ける必要がないだて眼鏡だし、戦闘では必要ない物だからだ。

そんな無防備な行動をする裏月だったが、相対する仮面の二人は迂闊に動く事ができなかった。今、彼女らの頭には裏月と戦う等という考えはない。如何にして撤退するか、その考えしか彼女らにはなかった。

——しかし、そんな彼女らの考えを嘲笑うかのように、戦場に声が響いた。

「行け——群鳥氷柱」
ぐんひょうつらら

響くと同時に、戦場に変化は訪れる。仮面の二人の周りに、幾つもの氷柱が突き刺さった。無論、ただの氷柱ではない。突き刺さった氷柱から冷気が溢れ、地面を氷結させていく。つまり、この攻撃は逃げ道を塞ぐ為の物。さらに、もう一つ変化が起きる。

「なにっ!？」

「くっ……」

舞い散るは桜。まるで、仮面の二人の逃げ道を塞ぐ様に、桜の刃が美しく舞う。氷と桜、相容れない筈の二つが、仮面の二人の逃げ道を塞ぐ。その光景は、どこか美しい芸術にも見えた。

「動かない方が良いよ? 動く……綺麗な桜が、真っ赤な血で美しく染まる事になると思うから」

また別の声が響く。今度は、その姿を見る事が出来た。近くの建物の上、そこには刃の無い刀を持った少女が仮面の二人を冷たく見下ろしている。

少女の容姿は、高町なのはと瓜二つ。違いは、髪型がツースайдアップになっている事や、背がなのはより5?ほど低いことか。低いと言っても、なのはの背が“なぜか”普通の小学3年生より高いので、140?はあるのだが。

その少女に合わせるかの様に、仮面の二人の後ろのは少し長めの刀——氷輪丸——を持った少年が、退路を断つ様に現れた。最後にもう一人……その一人は、裏月の近くに降り立った。

「なんや、ボクの出番がないやないの」

「市丸……お前ら尾行中じゃなかったか？」

「雰囲気ぶち壊しやなあ」

ごもつともである。まあただ、裏月に市丸と呼ばれた糸目の青年が来た時点で微妙に空気が崩れていた気がするが。それでも、天鎖斬月の切っ先を少しもずらさないのは流石と言える。

一方その頃……もう一つの結界内。つまり、なのはが展開した結界の内部では、ひたすら轟音が鳴り響いていた。その轟音が鳴る度に、破砕片が空中に飛び散り、時には破片と呼ぶには大き過ぎる程の碎かれた破砕も吹き飛ばされている。

そんな光景を一太刀で生み出していく相手と斬り合っている女性、シグナムは舌打ちを禁じ得ない。

技量や速度だけ見れば、天鎖斬月を持ったシグナムに分があると思えていいだろう。だが、彼女のコピーはそれを補うだけの圧倒的な力があった。ここまで一太刀でふざけた威力を出せる相手に、真っ正面から斬り掛かる等という愚策を取る筈がないシグナムは、自身の技量と天鎖斬月を用いて斬撃を受け流していく。

何度目かの攻防……自身のコピーの斬撃をいなしたシグナムが一度距離を取り後退し、天鎖斬月を構え直した。

「埒が明かない……か」

相対する相手——無表情の自分——を見据えながら、シグナムはポツリと呟く。その呟きは、事実問題を的確に表していた。結界内とはいえ、物を壊し過ぎるというのは少々気が引ける。

とは言っても、決して手がないわけではない。奥の手、なのは風に言えばとっておきが残っているし……何より試したい事もある。しかし、奥の手があるのはシグナムだけではなかったらしい。

——コピーのシグナムが、動いた。長剣の刀身の付け根にあるダクトパーツがスライドし、何かを排出する。

「あれは……！」

少し離れた場所で、その光景を見ていたなのはが排出された物の正体に気付く。排出された何か……弾薬の薬莢の様な物が地面に落ちて、乾いた音を立てる。瞬間、コピーのシグナムの魔力がいきなり上昇した。

（あの弾丸が魔力を瞬発的に上昇させた……間違いない。ベルカ式のカートリッジシステム）

なのはも資料でしか見た事がなかったが、あの特長からして間違いないのだろう。それだけの確信を少女は持っていた。そして、それは全く間違っていない。

「レヴァンティン……」

『Schlangeform.』

コピーのシグナムが初めて言葉を発する。恐らくは、手に持った長剣の名前なのだろう。レヴァンティンと呼ばれた長剣も、その声に

反応し……変化する。

「くっ……チィッ!!」

今度こそ、シグナムは舌打ちを隠すつもりなどなかった。魔力を瞬発的に上げた相手に対抗するかのように、シグナムも瞬発的に速度を上昇、一気に常人には捉えられない速力で移動する。

そんなシグナムが一瞬前まで居た場所に叩きつけられたのは、まるで蛇の様になった刃……レヴァンティンのもう一つの姿、連結刃だ。その蛇の様な変則的な動きで、圧倒的な速力を叩きだすシグナムを攻める。だが、その不規則な動きをもシグナムは己の動体視力を持って全て見切り、その身体能力を持って全て避ける。

シグナムが避けた事で、ビルに連結刃が叩きつけられる。それにより、蛇の刃の動きが一瞬だけ止まる。たった一瞬、しかしこの戦いにはその一瞬が重要だった。

純白の天鎖斬月の刀身からチリ、という音を皮切りに刀身の色と同じ何かが溢れ出す。

そして、連結刃の根元……つまりはコピー体に向かって空中から――

「月牙天衝――」

天鎖斬月を一陣振るう。放たれたのは純白の――何物にも染まっていない――月牙天衝。純白の斬撃が、凄まじい速度でコピー体に迫る……が、コピー体は強引に連結刃を引き戻し、その場を飛び退く。結果、標的を無くした月牙天衝は純白の斬撃の柱を作るだけに留まる。しかし、そんな事は予測済み……飛び退いたコピー体に向け射

角を変更し――

「――双牙ア!!」

シグナムが天鎖斬月を斬り戻す。その結果放たれるのは、もう一陣の月牙。文字どおり斬撃そのものがコピー体に向かって飛び……着弾と同時に、その姿を覆い隠した。

(直撃……いや)

(外したか……)

なのはとシグナムの思考が、同じ答えに辿り着く。一見、直撃した様に見えた月牙天衝。しかし、コピー体はギリギリで連結刃を戻し、月牙から強引に逃れた。が、当然ながら月牙天衝をその程度で避け切れる筈がない。

シグナムがビルを背に着地するのとはほぼ同時……煙を払いながら額から血を流したコピー体が現れた。

全く、我ながらタフなものだな、などとシグナムは他人事のように考えたが、直ぐ様思考を引き戻す。連結刃を戻した事で、再び長剣の状態に戻ったレヴァンティンが、もう一度カートリッジをロードした。

「炎……か」

「紫電……一閃」

まるでシグナムの呟きに応えるかの様に、コピー体が何かを呟く。紫電一閃、その名前を聞いた瞬間、何故かシグナムは何か懐かしい

感覚を感じ取った。カートリッジがロードされたと同時に、レヴァンティンの刀身は真紅の炎に包まれた。

紫電一閃——その刃が振り下ろされる時、敵はその閃く一瞬の光を見る事も叶わず、ただ地に墜ちるのみ。

そして、それを再現するかのようにコピー体が突撃、さらに地をおもいつき蹴って飛び——その刃を振り下ろした。

「な……っ!？」

同時刻、裏月たちの居る結界内では大きな揺れが起きた。ただの揺れではない……巨大な魔力の衝突によって起きる、謂わば共鳴反応の様な現象。

しかし、普通の魔力の共鳴現象ならば、いくら巨大でも違う結界内に影響を及ぼす事などあり得ない——原因の一つとして考えられるのは、裏月の持つ天鎖斬月・蒼天が一瞬だが反応……つまりこれは魔力の共鳴現象ではなく、天鎖斬月の共鳴現象という事だ。

その事が裏月の動揺を呼び、それを見逃さなかった仮面の戦士のうち一人が素早く地面に手をつけ、転移魔法を起動させた。

「逃がすかよ!！」

だがそれと同時に、少年が叫びながら氷輪丸を振るい、氷結の斬撃で動きを封じ様とし、千本桜の刃を控えさせていたさくらは本体の刀を振るって千の刃全てを仮面の二人に向かって放つ。

二人の攻撃が同時に到達……した瞬間、光が辺りを包み込んだ。そ

の光が晴れた時、残っていたのは氷結の後と――残された血の跡だけ。

「うにゃあ……逃がしちゃったね、冬獅郎^{どうしろう}」

「ああ、手応えはあったが……上手く逃げられたな」

いつの間にか少年の近くに来ていたさくらが、指を可愛らしく口に添えながら彼の名前を呼ぶ。少年……冬獅郎もそれに応えて事実だけを言うが、その表情に失望などの感情は見られない。

手応えや血の跡を見るかぎり、決して浅くはない手傷を負わせた、それで十分だろう。それより……

「さっきの地震、どうやらもう一本の天鎖斬月の方で何かあったみたいだな。決着が付いたか……それとも」

「どっちにしても、あの子どんどん天鎖斬月を自分のものにしてるよ。流石は、お兄ちゃんの騎士を名乗るだけはあるよね」

さくらの言葉は、見事に的を得ていた。彼女は驚異的なスピードで、天鎖斬月の力を引き出し始めている。先程の振動が、何よりの証だろう。

なのはが展開した結界内部……そこでは、見た人が呆れる様な光景があった。ひび割れるどころか、完全に砕けているシグナムの足下。しかしそんな状況でも、シグナムは天鎖斬月を両手で握りしめ、その刃でレヴァンティンを“受け止めていた”。そう、ジュエルシードによって引き出されたふぎけた力と、カートリッジによって底上げされた斬撃を……彼女は真っ正面から受け止めるという、バカみ

たいな事をやってのけたのだ。

「な、なんつー無茶を……」

衝撃から顔を守るために、手で顔を庇っていたのはが、かなり呆れを含んだ声でそう呟く。というか、彼女がビルを背にした時点で“回避”という文字はもうなかったのかもしれない。

さて、これだけの一撃を放てば、当然ながら攻撃をした方には大きな隙が生じる。そして……一瞬の隙も見逃さなかったシグナムが、この隙を利用しないとお思いか？

——シグナムが天鎖斬月を振るい、レヴァンティンをおもいつきり弾く。それにより、がら空きになるのはコピー体の身体。

「月牙——」

シグナムが天鎖斬月を腰溜めする様に構える。刀身からは、月牙天衝を放つ時に溢れる筈の純白の剣圧は……溢れない。

ひたすら斬撃を圧縮する。一欠片も残さず、圧倒的な力となるものを押し固める。

そして……シグナムが天鎖斬月を斬り上げる様に振るった。

「——龍閃ッ!!」

押し固められた月牙……それは全てを喰らい尽くす龍の一閃。龍の形を成した月牙がコピー体に喰らい尽き、一瞬にして反対側のビルまで吹き飛ばした。

壁に突き刺さる様に吹き飛んだコピー体が、その手に握っていた剣を手放す。瞬間、突き刺さったのは一枚のカード。それによってコピー体の身体が吸い込まれ、一瞬光を放つと投げた持ち主、なのはの手元に戻り彼女は綺麗にそれを掴み取った。

「月牙龍閃^{げつがりゆうせん}。通常、月牙天衝に求められる威力・飛距離・範囲・速度の内、月牙を極限まで圧縮させる事により、飛距離と範囲を犠牲に威力と速度を飛躍的に上昇させた月牙……まあ言うだけなら簡単ですが、やる分には結構ムズいんですね。っていうか、いつの間に使えるようになったので？」

「ついこの前だ。形だけなら以前から出来ていたのだがな。む、まだ腕が痺れているな……さて」

掴み取ったカードをいじくりながら、説明的な口調のなのはの質問に応えたシグナムが先程コピー体が叩きつけられた場所で立ち止まる。そこにあったのは……剣の模様をした小さなアクセサリ。

「これ、裏月に渡して調べてもらった方が良さそうだな」

「まあデバイス関係なら、裏月さんが一番早いですからね。それより……」

「なんだ？」

「師匠のデート。もう尾行しなくて良いので？」

「――あ」

さてさて、シグナムの記憶から見事な迄にすっぱり抜けていたヒナギクのデートだが、ただいま食事の真っ最中だったりする。が、何故か雪華の表情は半笑い状態。

その理由は、ヒナが涼しい顔で食している“真っ赤な”ハヤシライスの所為である。

「ね、ねえヒナ。それ、辛くないの？」

「辛いですよ。だから激辛ハヤシライスなんでしょう？ でも、ラツキーですよ〜、これを完食するだけで5万円が貰えるなんて」

言い忘れていたが、ヒナギクは凄まじい辛党だったりする。この事実を知っているのは、なのはを含めた高町家のメンバーと裏月やさくら達。因みに、シグナムが知らないのはヒナギクが彼女に遠慮して最近を作っていないからだ。

心なしか、雪華の目には店員が真っ青な表情をしている様に見える。ああ、今日の売り上げは赤字だな。どうでも良いが、ヒナギクの好物はオムライスとハヤシライスである。

「そういえばさ、ヒナが持つてるそのギターケースって、何なの？」

「ああ、これですか？」

激辛ハヤシライスをあっさり食べ終わり、普通に賞金を受け取ったヒナギクが、雪華の問いに応える為にギターケースを持ち上げた。てか、普通に賞金を受け取っている辺り、ヒナギクは変な所で遠慮がなかったりする。

「これね、ギターケースじゃないんですよ」

「ふへ？　じゃあ何なの？」

「バイオリンケース。私の宝物です」

「へえ、ヒナってバイオリン弾けるんだ。ねえねえ、今度聴かせてくれない？」

「良いですよ」

「ホント！？　やったー！！」

ヒナギクの了承が得られて、まるで子どもの様にはしゃぐ雪華を見て、純粋に可愛いな、何て思うヒナギク。そうだ、このバイオリンケースは自分の宝物。彼の記憶……その始めに持っていたのがこのバイオリンケースというだけなのだが。まあ、ヒナギク自身が音楽を愛しているのも、一つの原因であつたりする。

「ふえ……高そうなバイオリンだね。これ、何て名前なの？」

「ん、これはね――」

何より、このバイオリンを弾いていると、まるで誰かの心に触れている様な暖かい感覚を得る事が出来るから。そしてもう一つ……彼の唯一始めの記憶に残っている、このバイオリンの名前――

「ブラッディ・ローズ。それが、このバイオリンの名前ですよ」

……彼は知る由もない、このバイオリンは――彼の父親と兄の祈り

が込められている事を。そして……彼の大嫌いな『運命』というものを、彼自身が知らずに背負っている事を——今の彼は知る由もない。



数日後、なのはは暇潰しに海が見える場所を何となく歩いていった。ホントに、何となくである。

と言うのも、珍しくぽっかりと時間が空いてしまったのだ。裏月さんは、何か最近どこかに行っているし、自分の刀も同じくどこかに行っている。

（ま、裏月さんの交友関係にまで口を出すつもりもないし……ギンの放浪癖は何時もの事だしね）

と、なのはは思考を切り替える。彼女は、交友関係を広める事を好まない。というか、拒絶すらしているのかもしれない。だから、本当に親しい人くらいしか、自分から声を掛けたりしない。

でも、じゃあ何で——

「久しぶりだね、フェイトちゃん」

「あ——」

自分は一度しか会った事がない少女に、声を掛けてしまっているのだろう。少女が悲しそうにしていたから？　だとすれば、自分はどうやらお人好しのようだ。

別に彼女の生まれに同情するつもりはない。冷たいが、彼女より生まれが酷い人間だっている。いや、人間としてすら扱われない者だって。何て考えてしまう自分は、やはり冷たい人間だな、などなのは考えながらフェイトと同じ様に手すりに寄りかかった。

「どうしたの？　悩み事なら聞いてあげるよ。私で良ければね」

「えっと……あのね、私、何がしたいか分からないんだ」

「何がしたいか？」

僅か二回目の出逢いで、自分にあっさり悩み事を打ち明ける少女は案外天然なのかもしれない、とかなのはは考えながら少女に先を促す様に聞き返す。

「うん。母さんはね、自分のしたいようにすれば良いって言うんだけど……それが何だか分からなくて」

「……じゃあフェイトちゃん。質問するけど、フェイトちゃんは何であの青い宝石を集めてるの？」

「へ？　それは……母さんをお願いされたからで——」

「じゃあそれで良いんじゃない？ フェイトちゃんのお母さんは、やりたい様にすれば良いって言ってる。だったら、暗に自分のお願いを断っても良いのよ、って言ってるって事でしょ？」

「あ……」

「それを断らなかったのは、フェイトちゃんの意志。って事は、フェイトちゃんはお母さんのお手伝いがしたい。それで良いじゃん」

最後の言葉に、なのはは自然と笑顔を浮かべてフェイトを見ていた。それを見たフェイトも、自然と笑顔になっていく。

ちょっと強引だけど、元気づけられたなら結果オーライだね？となのはは思う。実際、目の前で人が落ち込んでいるのを見ると気分が悪いのだ。そんな事を考える彼女は、やはりお人好しだ。

「済まないが……少し話を訊かせてもらえないか？」

「ッ!？」

しかし、そんな時間にも終わりは来る。いきなり、という訳でもないが、少女の少し後ろ辺りに居る黒髪の少年が声を掛けた事で、フェイトの表情が一転して強ばった。

そして少年から逃げる為に、一気に駆け出してしまった……。

「くっ、まて——なっ!？」

少年は駆け出したフェイトを追え……なかった。それを実行する瞬間、誰かに反対方向に投げ飛ばされていたのだから。

それを行った人物——高町なのはは、先程とは打って変わって冷たい表情で自身が投げ飛ばした少年を見つめていた。上手く受け身を取った少年を見て、何だか舌打ちをしたくなって来た。確かに早く来てほしいと言ったが……些か、タイミングが悪すぎる。

「いきなり何するんだ!？」

「ふう……人の知り合いをいきなり恐がらせて、二言目がそれ？
ちよつとは冷静になったらどう。管理局最年少執務官——クロノ・ハラオウン君？」

「な——っ!!」

唐突に自身の正体を言い当てられた焦りなのか、冷静な彼……クロノにしては珍しくデバイスを展開してそれをなのはに向け——た瞬間、自分のデバイスが手から弾き飛ばされた。思わずクロノは、驚愕で目を見開く。

彼が見たなのはの姿は、自分が認識した時には既に変わっていた。執務官として実績のある彼が、なのはの動きを見逃した。それだけでも、クロノを驚愕させるには十分過ぎるが、さらに彼は無意識に一步下がる。

「だから、ちよつとは冷静になりなつて。それでも執務官なの？」

なのはの手握られているのは、先程クロノのデバイスを弾き飛ばしたと思われる、蒼と白の一丁の銃。そして……背中に展開された蒼い機械的な翼。それだけの情報でも、クロノの頭脳は簡単に少女の正体を導き出す。

ゴクリ、と一度息を飲み、クロノは嫌に渴いた口を開いた。

「キミは――エグゼキューター処刑人……高町　なのは……！！」

「ふうん、流石に私の事は知ってるんだ。まあでも、一応自己紹介はしないとね」

さて、何と名乗ろうか？　自称平凡な小学生では、一切説得力がないし、通り名のエグゼキューターは先に言われてしまった……ならば、やはり自分に似合う名前は、これしかないだろう。

エグゼキューター処刑人と呼ばれるにふさわしい、自分には。一瞬、クロノは見逃したが、一瞬だけなのはの表情が悲しげになる。

それはまるで――

「じゃあ自己紹介――『出来損ないの魔法使い』……高町なのはだよ」

彼女自身が名乗る名を……正確に表しているようだった。また、歪んだ運命は加速する。

始まりの終わりは……もう、近づいている。そして、なのはが出逢うべくして出逢う翡翠の少年との出逢いも――すぐそこなのだろうか？

第7話（後書き）

先に断っておきます、自分はクロノ君アンチではございませんよ（笑）

何か話の都合上、KY見たいになってますが、自分はクロノ君は結構好きです。まあ、それでもユーノの方が好きですがWW ユーナの大好きな自分ですWW（でも実は、最初はクロなののカップリングの予定だったんですよ、この作品。今回のクロノとの出逢い方はその名残。作者の気分次第ではクロなのに変えるかも（オイ））

さてさて、今回は千本桜の具象化形態が登場しましたが……はい、おもいっきりD・Cの芳乃^{ダ・カーポ}さくらを意識してますWW茶髪を金髪に変えれば、見事にD・C・？のさくらに早変わり（笑）うん、元にしたなのはと声優が一緒だから良いよね、とか思っていないよ。ホントだよ？（まあ、他にも理由はありますが）具象化を兄様と予想した人……ま、あながち間違っていないかもですよ。この意味は、後で分かるかも。

その他にも、何やらヒナの重要キーワードが出ましたが……宣言します。これはクロスの為の布石です（笑）だって、オリジナルの空白期を挟むと、残るのはSTSだけなんですもん（それが普通じゃね？ とか言わないの。あれ？ 深夜だからかテンションがおかしいな（汗））

予定しているクロスは三つ。一つは時空の双剣士でも予定している作品。もう一つは、先の話に出てきている作品。最後の一つはIFクロス。今回の伏線っぽいのもキーワードに上がるクロスであり、別作品の『烈火の少女と出逢いの物語』にも繋がるクロスです。因みに、IFクロスはヒナが色んな意味で悲惨かつ大変な事になりま

す。ま、ケガとかじゃないとだけ言っておきましようかね……。

予定しているのはこれくらい。楽しみにしてくれると嬉しいよ（キラッ ヤバイ、やはり深夜だからかテンションがおかしいです。

てば、いつも通り感想などをお待ちしています！！ 次回をお楽しみに！！

第8話（前書き）

第8話、完成しました。しかし、自分纏めるの下手だなあ（汗）
それに、文章も全然自信がないし……。

まあとにかく、今回は完全なのはが主役です。では、本編をお楽しみに！！

第8話

「『出来損ないの魔法使い』……だって？」

「……………」

クロノの呟きとも疑問とも思える言葉を聞いても、なのはは何も言わない。ただ、冷ややかな表情でクロノを見るだけ。

そしてその少年、クロノはまさに信じられないといった表情だ。しかし、それも当然なのかもしれない。目の前の少女が“あの”エグゼキューターならば、出来損ないな筈がない……少年が言いたいのはそういう事だろう。

——そんな事を考えている時点で、的外れも良いところなのだが……少年には、いや、殆どの人には理解できないだろう。理解できるのは、少女の事をよく知る人間、もしくは少女の“信念”を読み取る事の出来る人間だけだ。

最も、前者はともかく後者に属する者はたった一人、“彼”しか今のところいないのだが。まあ、二人目が現れるとも思えないし、今は関係がない事だ。とにかく、それを理解できないクロノは、思わずなのはに向かって叫んでしまう。

「ふざけないでくれ！！ 君がエグゼキューターなら……出来損ないなんて言える筈がないだろう！！」

エグゼキューター
処刑人。そう呼ばれるだけの“実力”なのはにはある。だが、こ

んなものは少女が欲しいものではないし、エグゼキューターだからそう……など勝手な価値観の押し付けだ。……人は、そういう生き物なのだろうが。

まあクロノの気持ちだが、少女に理解できない訳ではない。恐らく、無意識のうちに悔しい、という感情が少年の心に渦巻いている。仮にも、彼は執務官だ。それなりのプライドがあるのだと思う。

それが、目の前の少女の方が格上だと認めるのを拒んでいる――いやまあ、身長で圧倒的に負けているので、真面目な話それもあるのかもしれないが、いちいちそれを指摘してやるほど少女は少年に興味を持てない。それどころか、もう興味を失いかけているくらいだ。

「別に貴方に理解できるとは思えないし、理解してもらいたいとも思わないよ」

言いながら、なのはは武装を解除してクロノに背を向けて歩きだしてしまった。思わず、クロノは追い掛ける為に駆け出しそうになるが、ふとなのはが立ち止まって、もう一度だけ振り向く。

「言ってなかったけど、私達は依頼うんぬん関係なしに、今回は単独で行動させてもらいますから。ハラオウン提督にもそう伝えておいてくれますか？」

「な、何を――」

「貴方達がさっきの子やジュエルシードをどうしようが勝手ですけど、何かあった時はこっちも勝手に動きますよ、って事だよ。二度は言わないから、きっちり伝えてね」

当然返答など聞かない。言うなり、なのはは今度こそ振り替えるこ

となく歩きだした。さて、これで管理局……と言うか、戦艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウン提督はこっちにちよっかい掛けてくる事はないだろう。彼方から直接依頼が来れば別だが、それはそれで貯金が増えるので構わない。

ま、それは殆ど無い可能性だ。――なのはの予想では、恐らく解決“だけなら”アースラメンバーでも出来るだろう。が、そうになると自分たちの町やあの少女が無事に済むかは……残念ながら保証できない。

まあそういう訳だから、こっちはこっちで適当にやるとするか、という事である。それに、そろそろ頼れる最強の増援も到着する頃だろうから。

そう考えを巡らせながら、なのははその場を後にした。

所変わって、場所はこの前の車椅子の少女が住んでいる家。冬獅郎とさくらが手傷を負わせた仮面の二人が仕掛けた結界は、当然ながらとつくのとうに解除されている。

さて、ではそんな家の中には誰が居るかと言うと……

「ま、また負けた……」

「にやはは、18連鎖って……」

「えげつねえな……」

「まあ、裏月くんはこの手のゲームで挑むこと自体、間違ってるんじゃない？」

「はっ、百年早ええんだよ」

何故か、裏月と車椅子の少女、八神はやてがぷよ○よで勝負していた。因みに、ただいまはやてが絶賛20連敗中である。何でこんな事態になっているかと言えば……数日前、つまり仮面の二人が逃亡してからの話に遡る。

「逃がして良かったん？」

「良いつて訳じゃねえが、今無理に捕まえる必要も無いだろ。今はジュエルシードの回収……いや、プレシア・テストロッサの方を優先したいしな」

市丸の質問に、裏月は何ともない風に応える。事実、裏月にとって優先したいのはジュエルシードの問題だろう。仮面の二人の問題は、極力同時進行でやっていけばいい。

天鎖斬月を手放して、服装を元に戻しながら裏月はこの場を離れようとした。既に結界は解かれているので、長居は無用だ……が、どうやらもう少し長居をしなければならぬらしい。

「あ、お兄さんみーっけ！」

「あ？」

そんな声を聞いて、裏月は何事かと後ろを向く……と、彼の額に汗が垂れるのを市丸は見た。そこに居たのは、先ほど裏月が別れた筈の車椅子の少女だ。

ここで、二人が別れる時の会話を思い出して欲しい。裏月と少女がした条件……もうあっさりと満たされているのである。

さらっと裏月の服を掴み、かなり良い笑顔で少女は、言う。

「私の勝ちやな、お兄さん」

「……ああ、俺の負けだよ」

こんな事だったら、もっと面倒な条件にしておくんだった、何て思っても後の祭り。結局、少女の誘いを受けて今現在に至るという訳である。

何で他の面々まで居るかって？ 全員そろって「面白そう」の一言でついて来ましたが、何か？

「さてと、ちょっとトイレでも言ってくるから、誰か変わってろよ」

「じゃあボク。ボクがやるよっ!!」

「よし、勝負やさくらちゃん!!」

名乗り出たさくらにコントローラーを渡し、裏月は立ち上がって部屋を出る。何か後ろから、はやての叫び声が聞こえるが……多分気のせいでは無い。

部屋を出た裏月が目指す先はトイレ……ではなく、別な部屋の前で立ち止まった。彼は部屋の扉を迷いなく開き、そこからも迷いなく歩いて本棚の前で再び立ち止まった。

「コイツか……変な魔力出してんのは」

立ち止まった彼が見つけたのは、まるで封じられているかの様に鎖に縛られた、一冊の本。微力だが、魔力を出している事から、恐らく裏月の相棒と同じ魔導書の類なのだろう。

何の反応も無い魔導書に対して、裏月は目を閉じて腕を静かに翳す。その彼の翳した手から、何か薄い光の様な物が魔導書を包み込むように溢れた。

（……成程な。強引にシステムに介入しようとするれば、仕掛けられたシステムトラップが発動する仕組みか。コイツは、迂闊に手が出せない訳だ）

今、彼は魔導書に干渉して何が在るかを単純に探っている。これは彼の特有の能力……この手の物に対しての『干渉』だ。それを使って、魔導書の情報や機能を的確に読み取って行く。

プログラムに介入してシステムを動かすのではなく、システムに干渉して情報を読み取るのだから、裏月が発見したシステムトラップが発動しない、という仕組みだ。

読み取って行くにつれ、なぜ仮面の二人がわざわざ少女の家を“監視”するだけに止めていたかが、これで何となく裏月には解った。発動して何が起こるかまではまだ解らないが、発動まで手出しが全く出来ないとは……厄介な魔導書だな、と裏月は考える。

もう少し情報を読み取ろう、そう考えて裏月が深く干渉した瞬間……彼の表情が少し歪む。

「中に……誰か居るのか？」

干渉を行っていた裏月が小さく眩く。今、彼が読み取ったのは情報じゃない……“ヒト”の心だった。

（これは、深い悲しみ？ それだけじゃねえ……強い怒り。それも他人じゃなく、自分に向けられた物。そして何より――）

ここまで強く引き込まれると、もう裏月の意志では止まらない。勝手に中の人物の感情が、彼に向かって流れ込んで来る。

深い悲しみ、強い怒り。そんな感情がストレートにぶつけられる。だが、もう一つ。隠して押さえ込んでいる感情が伝わる。瞬間、裏月の瞳から……一筋の涙が流れ、それを皮切りにとめどなく涙が溢れ出す。

止まらない、止められない。何時ぶりだろうか、こんなにも涙を流すのは。最後の感情それは、

――孤独。

始まりの終わりを待たずして始まる……新たな物語の始まりの合図なのかもしれない。



「む、無茶だよフェイト!! ジュエルシードを強制的に暴走させるなんてっ!!」

「だけど……もう時間がない。管理局が来た以上、もう迂闊に動けない。だったら、残りを一気に回収するしかないから」

「そ、それはそうかもだけどさ……」

マンションの一室、そこではフェイトと使い魔のアルフが口論を繰り広げていた。と言っても、反対していたアルフはあっさり言葉に詰まってしまう。

彼女たちが話しているのは、残りのジュエルシードの事。彼女たちのジュエルシード回収は、シグナムとヒナギクが一度妨害を行った事以外は、極めて順調と言えた。が、今は管理局が来たことにより状況は逆転した。恐らく、自分たちが回収し損ねているジュエルシードは、殆ど回収されてしまっている。

ならばどうするか、答えは簡単だ。残りのジュエルシード……今まで手が出せなかった海の中のジュエルシードを一気に回収すれば良い。

「ごめんアルフ。でも、もう決めたことだから……」

「ああ、もう!! わかったよフェイト。アタシも協力する」

「……ありがとう、アルフ」

自分の使い魔に微笑み、フェイトはマンションの扉を開ける。海の中のジュエルシードを強制的に暴走させて、まとめて封印。言葉にするのは簡単だが、実行するのは無茶と言えた。

何せ、封印するジュエルシードは全部で六個。暴走させる為に使う魔力を計算に入れると、とてもでは無いが少女の魔力でも足りない。それでも少女はやるのだろう、母の願いを叶える為に。

しかし、そのために自分を犠牲にするなど、絶対に少女の使い魔としては許容できない。だから、アルフは少しでも負担を減らす為に言葉を放った。

「ねえ、フェイト。ユーノに協力してもらおうよっ!!」

「――ダメだよ。ユーノはまだ万全じゃない。それに……迷惑はかけられないから」

「フェイト……」

だが、それも全く功を成さない。確かに、ユーノに協力を頼めば負担は減るだろう。けれど、今の彼は本調子ではない。アルフが治療したとはいえ、魔力まで回復した訳ではないのだ。今も、睡眠をとっているのがその証拠だ。

結局、アルフの意見もこれ以上出ないまま……フェイトは賭けを実行した。

二人の会話に少し遅れ、場所は戦艦アースラ内部。そこでは、執務官のクロノとアースラの艦長であるリンディが会話をしていた。そ

の内容は……この前ののはの話だ。

「全く、貴方も厄介な人の機嫌を損ねてくれたわね……」

「う、すみません」

「いいえ、良いのよ。彼女がまさかあの少女に接触していたなんて、誰も予想できなかったんだから」

「……その少女の行方は、まだ掴めませんね。一体、何の目的でジュエルシードを回収しているのか……」

あの時、クロノがフェイトに接触したのは、完全に狙った行動だった。彼らがここに到達した時、偶然アースラが彼女たちがジュエルシードを回収する映像を捉えていたのだ。

だからこそ、一度目の接触で事情を訊いてしまいたかったのだが……それはなのによって妨害されている。

「ふう、失敗したわね。あれ以降、彼女たちは目立った行動に出ない。もう少し冷静に行けば良かったわ……まさか、あの子に関わっているなんて」

「あの、艦長。もしかして、エグゼキューター……高町なのはと知り合いなんですか？」

まるで高町なのはの事を詳しく知ってる様な口振り。気になったクロノは、おずおずと言った感じでリンディに質問する。

質問を聞いたリンディは……何かを思い出したのか、疲れた表情で

ため息を吐き、そして口を開いた。

「まあ、一応ね。でも私、あの子の事は少し苦手なのよね」

「は、はあ……」

なにやら、過去に何かあったらしい。彼にしては珍しく、かなり興味が湧いてしまいもう少し聞き出そうとクロノが口を開いた――その瞬間、けたたましい警戒音が鳴り響いた。

「艦長！！ 搜索区域の海上にて大型の魔力反応を感知しましたっ！！」

「なにっ！！」

「あ、あの子、何て無茶をっ！！」

局員の言葉と共にモニターに映し出されたのは……暴走したジュエルシードが作り出した竜巻と戦う、フェイトとアルフだった……。

同刻、海が見える丘。そこには、ジュエルシードの反応を感知したなのはが居た。暴走している場所から大分離れているが、それでも結界越しから数本の竜巻や雷撃が見える。

「……随分と無茶をするね。あれじゃあ、どうぞ倒してくださいってジュエルシードに言ってるも同じだよ」

呆れた表情を浮かべて、誰に言う訳でもなくなのははそう言った。ただ、なのはの言っている事は正しい。本当に、こんな行動は無謀もいいところだ。

「さて、どうしようかな……」

奮闘するフェイトとアルフを冷静に見ながら、なのはは呟く。恐らく、アースラの面々は参加などしないだろう。彼方にはジュエルシードを抑えられる優秀な艦長が居るのだから、わざわざ行動を起こす必要もない。

ならば、後はこちらがどう動くかなのだが……と、なのはの視界に一人の少年の姿が目に入った。

ハニーブロンドの髪に翡翠の瞳……なのはの記憶が確かなら、ジュエルシードを発掘した人物、ユーノ・スクライアだ。だが、その体は今にも倒れそうな程に弱っているらしい。

当然ながら彼の目的はあのジュエルシードだろう……が、こんな弱った状態でどうしようと言うのだろうか？　思わずなのはは近づき、その身体を支える。

「え？　君は……」

「ねえ、こんな状態でどうするつもり？」

「――行かないと。フェイト達を……助けないといけないんだ」

ユーノの返しに、なのはは再び呆れた表情になる。まあなのはが言っても、彼女を知る人物ならお前も似たようなものだ、とでも言われるだろうが、何とも無茶というか何と言うか……自分がこの状態なのに、なお他人を助けようとするのか。

しかし、そんな彼を見てなのはは、また彼女にしては珍しく少年に興味を持った。その証拠に、わざわざ少年に魔力を流し込んだのだ

から。

「あ……魔力が」

「私の魔力を分けて上げたから、十分動ける筈だよ」

「あ、ありがとう!! えーと……」

「なのは。私は、高町なのはだよ」

「ありがとう、なのは!!」

お礼を言うなり、ユーノはあっという間に飛行魔法で結界内に突入して行った。時間がないのは分かるが、いくらなんでも急ぎ過ぎだろう。しかも、なのはの事も一切訊いて来なかったし……彼の行動に、なのはは苦笑とも取れる笑みをこぼした。

「さてと、私はどうするか——なーんて、最初っから決まってるんだけどね。って、電話?」

なのはが行動を起こそうとすると、図ったかのように彼女の電話が鳴り響く。面倒なので、彼女はディスプレイに表情された名前も見ずに電話に出た。

「もしもし、今ちょっと忙し——って、依頼ですか? 因みに内容は——」

どうやら、電話の相手は親しい人物だったらしい。こんな状況なのに、彼女は話を聞いてしまう……いや、相手が相手なので、こんな状況だからこそ、と言った方が正しいかもしれない。

「――はは、こういうのをナイスタイミングって言うんでしょね。いや、こっちの話ですよ。依頼、了解しました。じゃあ今はちょっと忙しいというか、今すぐ依頼に入らないといけないらしいので、また後で連絡します。はい、じゃあまた――レジィおじさん」

電話を切ったのはが、携帯を閉じてポケットの中に突っ込む。全く、本当にナイスなタイミングという物は在るらしい。どちらにしろ、自分は介入以外の行動は無い様だ。まあ、こっちもそれを望んでいたのだから、好都合だ。

少女は、自身の首に掛けられた蒼白い宝石に問い掛ける。やはり、仕事ならばこちらだ。

「往ける？ 『フリーダム』」

『Yes Master. 貴方の信念を貫き、その心のままに、行動を。私は、その為の月剣、つるぎ、です』

ある程度の自我を持つ自身のデバイス……その言葉に、そっか、と呟きながら頷く。ならば往こう……その心のままに――

「フリーダム、システム起動」

『Yes Master.』

たった一言、その一言でなのは姿が変わる。まず、服は蒼いミニスカートと白いパーカーというかなりラフな格好――バリアジャケットを纏う。

さらに、背中には左右5対の計10枚の蒼い機械的な翼、両腰部には折り畳まれた武装と補助的なスラスターの役割を果たす物が装備された。最後に、蒼と白にカラーリングされたライフルをその手に、掴む。

『『FREEDOM』システムオールグリーン。武装名、マギリングガンポッド『ルシファー』を除き全起動確認。進路クリアー、発射タイミングをマスターに譲渡します』

「了解——高町なのは。フリーダム、目標へ飛翔します!!」

ウイングを展開し、白い粒子が噴出する。両腰のスラスターからも同じく魔力粒子が噴出し——その瞬間、高町なのはは翔んだ。

——飛翔する翼。己の信念を貫く、自由の月剣、つるぎ、が……遂に動き出した。それは、始まりの終演を予期していたのかもしれないかった。

同じ時、フェイト達の行動を感知したアースラでは、局員が忙しく動いていた。その中では、かなり冷静な表情でモニターを見ていたのは、執務官のクロノ。しかし、その隣にいる艦長のリンディは、遣る瀬ない表情だった。

「艦長、彼女たちが力を使い果たす、もしくは自滅した時を狙う……これで良いですね？」

「……ええ。悪いわねクロノ、嫌な役を押し付けて」

「……いえ、僕は僕の仕事をこなすだけです」

気遣う様なリンディの言葉にも、クロノは首を振って応える。

先に、なのはが考えた予想は見事的中していた。彼らは、完全に静観に決め込んだらしい。確かに、戦術的に見れば、これは正しい選択なのかもしれない。

――だが、それを認めない人物というものは、いるものなのだろう。

「か、艦長！！ 結界内に反応……これは、ジュエルシード発見者、ユーノ・スクライアのものです！！」

その報告と同時に見えたのは、暴走によって引き起こされた竜巻をバインドで縛る、ユーノの姿だった。なぜ彼があの場合に……そんな考えが二人の頭に過るが、事態はさらに急変する。

二度目の警戒音が、艦内に鳴り響いたのだ。

「今度は何だっ!？」

「け、結界内に突入する反応を感知!! 通常飛行魔法の……約三倍!?! 今も加速してます! 魔導師……いや、速い!!」

「何なのっ!?!」

アースラでも捉えきれない速度で、何かが結界内に突入した。そんな彼らの焦りを知ることもなく、フェイトは既に限界に達していた。ユーノが参戦した事により、持ち直したと思われた戦況だったが、もう彼女の魔力は底を尽きかけている。そんな状態でも、暴走したジュエルシードは容赦なくフェイトに襲い掛かった。

「ああっ!!?」

「「フェイトっ!？」」

放たれた雷撃が、一瞬だが気を抜いたフェイトに直撃した。只でさえ防御が薄い彼女が、魔力を殆ど無くした状態で耐えられる筈がない。

為す術もなく墜ちていくフェイトを助ける為、アルフが必死に飛ぶが……それよりも早く、墜ちる少女に向かって止めとばかりの雷撃が左右から迫りくる。

間に合わない……もはや打つ手なし。そう思われた——が、その事実をあつさりと覆す存在が、半瞬前に行動を起こしていた。

結界に突入した何か——高町なのはは、状況を一瞬にして理解し、表情を引き締め動いた。一度旋回しながら射角を変更、そこからウイングを展開……ハイマツトモードにて姿勢制御を行い、両腰の武装をはね上げ、そこから魔力式亜音速弾頭加速砲「レールガン」を放った。

僅か半瞬、その間になのははこれだけの事をやってのけたのだ。放たれた二つの弾丸は、一瞬にして正確に雷撃と衝突、爆炎を上げる。その衝撃でフェイトは吹き飛ばされたが、それはアルフが上手く受けとめた。

そして、二人を護る様に前に現れたのは……神業とも呼べるものがあったりとやってのけた、高町なのはだ。少し二人を見て、その行動によって顔が見えたフェイトは、表情を驚きに変える。

「な、何で……」

「また会ったね、フェイトちゃん——っ」と

挨拶をする暇もなく、なのは手に持ったライフルのトリガーを射角を変更しながら、三度連続で引く。それに反応して放たれた桜色の熱線は、迫っていた雷撃を全て打ち落とした。これには、フェイトもだがアルフとバインドで竜巻を抑えていたユーノも驚愕する。

今まで自分たちが手間取っていた物を、目の前の少女は何ともない様に対処して見せたのだ。

「ん、これじゃあ落ち着いて話も出来ないね……ちょっと黙らせようか」

「黙らせるって……どうやってさ!？」

「ギン」

『はいはい、人使い荒いなあ』

アルフ問いには応えず、変わりに誰かの名前を呟くのは。すると、どこからか声が聞こえる。それにより、またもやフェイト達は驚愕の表情になるが……次の瞬間、さらに自分たちの理解の範疇を超えた事が起きた。

『死ころせ——神かみしにのやり殺鎗』

刹那。言葉にすればそれだけだ。たったそれだけの時間で……ジュエルシードによって作り出された無数の竜巻が、物理的に真ん中からたたっ斬られた。フェイトとアルフには、何が起こったから理解

できない。辛うじて、ユーノが見たのは竜巻を斬った“刀”だ。それも本当に一瞬、次の瞬間には消え失せていて、とんでもない衝撃波が解放されただけだった。

その理解の範疇を超えた事を起こした人物、市丸ギンは先ほどまでなのはが居た遥か後方の丘に佇んでいた。その隣には刀を背負った少年、冬獅郎もいる。

「これ、キミが海ごと氷らせた方が早かったんちゃう？」

「めんどくせえ。てか、良いのかよ、まだ復活しそудぜ？」

「平気や。なんたって——ボクの主やからね」

そう言い、笑うギンから読み取れる物は……強い信頼。ここまでコイツが信頼を示すのも珍しいな、なんて冬獅郎が考えてしまう辺り付き合いの長さが伺える。

まあ、コイツがここまで言うのだから問題ないだろう……それに、もう一人近づいているしな、と冬獅郎は視線を向ける。その視線の先には——飛翔する烈火の騎士が見えていた。

「来た……」

「来たって何が……ってうおっ!？」

竜巻が物理的に斬られただけでも訳が分からないのに、今度は近くに強い衝撃が出る。誰かが、空中に着地したのだ。もう、アルフからすれば何がなんだか分からない。そして、衝撃が晴れた時そこに居たのは……アルフとフェイトには

見覚えがある、在り過ぎる人物だった。

「あ、貴方は……」

「全く、私は自分の力量を弁えろと言った筈だがな」

卍型の鐐を持つ刀を持ち、呆れを含んだ表情でそう言うのは、ヒナギクの騎士、シグナムだ。

何でここに居るのか……そう言いたそうなフェイトの表情に気付いたシグナムは、更に呆れた表情になった。

「バカ者。これだけ大暴れすれば、私でなくとも気付く。学習能力が無いのか、お前たちは？」

「うう……確かにそうですねって、学習能力はありますよっ!？」

「どうか。この光景を見るだけで、説得力が無いな」

本当に、この二人は敵対しているのだろうか、という疑問が浮かびそうな程に仲が良さに会話をするシグナムとフェイト。この光景には、フェイトを抱えるアルフと近くに来ていたユーノも呆気に取られる。

とまあ放っておくとまだ続きそうな会話を止めたのは、極めて冷静なのはだった。

「シグナムさん。そういう話は後回しで、とりあえずアレを黙らせましょう」

なのはが言いながら指を差した先では……先ほど寄りも激しく暴れているジュエルシードがあった。どうやら、機嫌を損ねてしまったらしい。

「ふむ、加減の必要は……無いらしいな」

「当然。往きますよ」

シグナムが天鎖斬月を前に構える。溢れるのは、単純な斬撃と呼べるもの。

なのはが翼を展開する。更に、翼の上段に装備された白い砲門、プラズマブラスターを両肩にシフト、両腰のレールガンも再びはね上げ、ライフルと合わせてチャージを開始する。前方に集束を開始した魔力の塊……それはあつという間に膨れ上がり、なのはの数倍は在ろうかという桜色の球体を作り出した。

準備は出来た。ならば、後はやるだけだ。シグナムが天鎖斬月を振り上げ——おもいきり振り下ろす。放つは、斬撃そのもの。

なのはがライフルのトリガーを引き——圧倒的な魔力の塊を解放した。

「月牙——天衝ッ!!」

「デイベインバスター・ハイパーバーストモードッ!!」

『解放』

砲撃と斬撃……その二つが放たれる。それを見たフェイトの頭に過った言葉は……圧倒的という文字だけ。

暴走した竜巻と衝突した二つの“力”は、一瞬鬩ぎ合いになり——
とてつもない衝撃と共に大爆発を起こした。

「……あ」

衝撃で思わず目を閉じていたフェイトが、目を開けた時に見えたのは静けさを取り戻した海と……六個の青い宝石、ジュエルシールドが浮かんでいる光景だった。

「な、何て出鱈目な……」

「そお？ 単純に“力”をぶっつけただけ。まったく、我ながら芸が無いよ。さて、と」

ユーノの眩きにも、何ともない風に応えるなのはがいつの間にか手に持っていた六枚のカードを一気に投げた。

それは寸分の狂いもなくジュエルシールドに刺さり、吸い込み封印が完了した。普通なら、カードはなのはの手元に戻るのだろうが、今回はそうすると明らかにフェイトと敵対しそうなのでその場に止める。

漸くゆっくり話が出来る……そう考えたのはだったが、すぐにその思考を切り捨てた。

——空を切り裂き、巨大な雷撃が海に直撃したからだ。素早く動いたのは、近くにいたユーノを抱えたシグナムとなのはだ。離脱して回避行動を取る。

「わあっ!?!」

「なのは、これはっ!？」

「次元干渉……多分、牽制目的ですね」

なのはの予測は、やはり正確だった。2射目の雷撃が海に直撃した瞬間、アルフがジュエルシードを回収する為に動いた。まずは三個のジュエルシードを手取る――しかし、そこまでだった。

残りの三つのジュエルシードは少し離れた場所に在るが……その近くに執務官のクロノが転移してきた。

力尽きたフェイトを抱えながら、執務官を相手取り残りのジュエルシードを回収する……分が悪すぎる賭け。そんな事を実行するほど、アルフは自惚れてはいない。

直ぐ様魔力弾を作り出し、海上に向かっておもいきり叩きつける。執務官が制止を掛けているが、知った事では無いアルフは、水しぶきに隠れて撤退した。

「あらら、今さら出てきて横取りですか？」

「なっ!？」

追跡が不可能と判断したクロノは、仕方なくジュエルシードを回収しようとしたが、残ったジュエルシードはなのはの手元に戻ってしまう。

これには、クロノも杖を向けてなのはを睨み付けてしまう。

「君は――」

「何をしたのか分かっているのか、でしょ？　まったく、ひねりが無いねー」

「だ、だから――」

「ああ、私は君みたいな子には微塵も興味がないの。とつととハラオウン艦長の所に案内してくれない？」

まさに反論を許さない。そんな具合になのはは言葉を紡いでいく。何かさりげなく、えげつない言葉が混ざっていた気がするが……気のせいでは無いだろう。

何か、心が折れそうになるクロノだった。というか、もう折れているのではないだろうか？

「アイツ……あの執務官のこと、嫌いだろ？」

「だ、断言しますか……まあ、確かにそうかもしれないけど」

何か、段々とクロノが可哀想になって来たシグナムとユーノだった。さて、これだけやれば出てくるだろう、となのはが思った瞬間、崩れ落ちているクロノの隣にモニターが現れ、アースラ艦長であるリンディ・ハラオウンが顔を出す。本当に、なのはは未来でも読めるのだろうか……。

「お久しぶりです、ハラオウン提督。優秀そうな息子さんをお持ちのようで」

「……お久しぶり高町さん。いきなり皮肉をありがとうございます」

「いえいえ、本心ですから。さて——私が先ほど受けた依頼について説明したいことがあるので……通してくれますよね？」

「え、ええ。もちろん」

リンディは今切実に思った……誰か胃薬をください、と。

時を同じくして、アルフが時の庭園を訪れているとき、一人の人物が海鳴に降り立った。

若い黒髪の青年のようだが、どうやらここに来たことがあるらしく懐かしそうに辺りを見回す。が、何かに気付いたのか表情を変えた。

「……何処かのバカが随分と暴れたらしいな。止めたのは……成程な、裏月が天鎖斬月を渡した人間と、なのはか。ならば、彼方が動くまで散歩でもするか」

——動く。歪んだ物語が、刀に選ばれし人物が、幻想の宝石^{ねがい}が。

烈火の騎士——シグナムが。

運命を背負う者——ヒナギクが。

天才と呼ばれし青年——裏月が。

出来損ないの魔法使い——なのはが。

白河家の当主にして最強の増援——斬月が。

それぞれの想いが交差し、始まりは終わりへと誘われる。

さあ……歪んだ物語の終演を——始めよう。

第8話（後書き）

いやあ、まさに魔改造なのはさんですね（オイ）　ぶっちゃけて言ええ、単純な力という点だけで考えると、主要メンバーの中でシグナム以外は皆ほとんど完成されています。

因みに、なのはのストーリーはシグナム並に用意されているんですよ（笑）　さて、もうすぐ無印の終わりも近いています。予定では、無印が終われば空白期の話が二つあります。片方はシグナム：まあぶっちゃけると迷子になります（は

もう片方はなのはの話。今回ちょっとだけ触ったなのはの事を理解している人間が出てきます。そして……フェイトの扱いが散々かも（コラ）

そんな感じで、楽しみにしててくださいと嬉しいです。さて、今回はクライマックスも近いので次回予告！！　そろそろチート二名（ヒナギクと斬月）も動きますよ……ふふふ。

次回の烈火の翼は！！

「良かったですね。ハラOWN提督の依頼だったら、報酬金額が五割増しでしたよ♪」

「頼むよ……フェイトを……プレシアを助けてくれっ！！」

「ああ、任せておけ」

「見せて上げるよ……私のとおきをねっ!!」

「私の弟子には悪いですけど、そろそろ派手に動きましょーか」

「……たくっ、俺の主も人使いが荒いな」

次回、『処刑人・エグゼキューター』／最強の援軍、見参』

「久しいな……プレシア」

歪んだ物語が――また加速する。

第9話（前書き）

第9話、完成です。今回は次に繋ぐための話……にしては長いなあ
（汗）

まあ、とりあえず舞台上がる人間が出揃う回ですね。では、本編
をお楽しみに！！

第9話

時の庭園。それは、高次元空間内に存在する文字どおり“庭園”だ。魔法技術によって作られており、次元間航行も可能な移動庭園となっている。

今現在、この庭園に出入り出来る人間は多くない。ここに出入り出来る人間……一つの方法としては、この庭園の座標軸を知っている人間に案内してもらう事。もう一つは——その知っている人間が直接転移する事だ。

「プレシアッ!!」

大きな音を立て、一般家庭ではあり得ない玉座の間に入って来たのは、今はぐっすりと眠っているフェイトの使い魔、アルフだった。何やら、かなり焦った様子だが……そんなアルフに名前を呼ばれて振り返ったのは、フェイトの母親であるプレシア・テストロッサ。

振り向いた彼女からしてみれば、なぜ娘の使い魔であるアルフがここにいいのか理解できなかったが、次の彼女の叫びで漸く理由が分かった。

「頼むよ! フェイトを止めておくれっ!! あの子、このままじや管理局に直接戦いを挑んじゃう!!」

「なっ……あの子、そんな事を……」

そう、残りのジュエルシールドが管理局の手に——正確に言えば、な

のはの手に――ある以上、もはや管理局に戦いを挑むしか方法は無い。

確かに、これはもう自分に頼むしかないだろう。アルフがここに来たという事は、彼女ではフェイトを止められなかったという事だ。ならば、言い出した自分が言うしか、方法は無い。

だが――

「……ごめんなさい、アルフ。それは出来ないわ」

プレシアは、小さく首を左右に振って、しかし確かに拒否をする。自分の願いを……叶える為に。

「どうしてさ!?! あの子がどうなっても良いのかい!?!」

「それは――っ、ゴホッ!! ゴホッ!!」

「プレシア!?!」

プレシアが何か言葉を言う前に、彼女が突然咳き込みながら倒れこんでしまう。倒れこんだプレシアを驚きながらもアルフは支える……が、プレシアが吐き出した物を見て、その表情は更に驚愕に染まる。

彼女が吐き出した物――それは、真っ赤な血だった。

「アンタ、これ……ぐっ!?!」

驚愕を隠せないアルフがプレシアを問いただそうとした時、彼女は全身から力が抜けていくのを感じた。魔力が吸い取られている……

そう理解した時には、もう腕も動かせない程の状態になっていた。同時に、フェイトとのリンクも強制切断され、アルフの下には魔法陣が展開される。

これを行った人物、プレシアは弱々しい笑みを浮かべながら、申し訳なさそうに言葉を紡ぐ。

「ごめんなさいね、アルフ。私が言うのもおかしいかもしれないけど……全部が終わった後、フェイトをよろしくね」

「プ……レ、シ……ア——」

何かを言おうとしたのかもしれない。アルフは、腕を必死に伸ばしてプレシアを掴もうとする……しかし、それが彼女に到達する前に、アルフはプレシアが行使した転移魔法により、何処かへ転送された……。

「もう、戻れないわね」

一人になった自分。口元の血を拭いながら、呟く。だが、同時に何を今さらと考える。

そうだ、もう戻れないのだ。この選択をした瞬間に、その事は決まっていたのだから。

——決して取り戻せないもの、それが過去。それでも、失ったものを取り戻そうとする者を……一体、誰が責められるのだろうか？
その答えは、誰にも解らないのかもしれない……。



戦艦アースラ艦内。そこはまあ微妙な空気に包まれていた。見事なまでの笑顔でリンディと対面するなのは。そのなのはを、嫌な予感しかないという風な表情で見るリンディ。

その他と言えば、自分の母が普通のお茶を飲むなんてっ!?　という感じで驚愕しているクロノ。差し出されたお茶とお菓子を至福の表情で食すシグナムと、少し遠慮しながらも同じ様に食べるユーノが居たりする。

そんな状態の中、なのはがあっさりと話を切り出した。

「さて、ハラOWN執務官は何で私がさっきの件に手を出したか、知りたがってしましたよね?」

「え……あ、ああ」

突如自分に話を振られて反応が遅れたクロノだったが、それでも出来るだけ平然を装って頷く。

それを見たのはは、じゃあ応えて上げる、としっかり前置きをして言葉を放った。

「それが私の受けた『依頼』だからだよ、クロノ・ハラオウン執務官」

「依頼……？」

「そ。誰から受けたかは伏せさせてもらうけど、『ジュエルシードの回収』を私は請け負ったの。当然、管理局の関係者からね」

だから私はあの場に介入した。暗にそう、なのはは言っているのだろう。

彼女は一度そこで言葉を切り、わざわざ自分で入れたお茶を口に含み一休みする。が、その行動を終えると、なのははリンディが驚く一言を付け加えた。

「ああ。因みに、依頼の報酬額がアースラ……まあぶっちゃければリンディ提督にツケられてますから。依頼終了後、キツチリ払ってくださいね。もちろん、ビタ一文も負けませんから」

「……ええっ!？」

「む、この菓子は美味しいな。食べるか、スクライア？」

「あ、はい。いただきます」

下の発言二つは無視するが、なのはの言葉にはリンディだけではなくクロノも口を出してくる。まあ、そりゃいきなりこんな事を言われれば反論したくもなるだろう。

「ちょっと待て!! ツケとは何だツケとは!?!」

「そのまんまだよ。大体、貴方たちに任せてると、地球が吹き飛びそうだから私が居るんだよ? それくらいは、しっかり払ってくれないとね」

「それはどういうー」

「この船、大した戦力無いでしょ?」

なのはの言葉に、クロノとリンディがピタリと動きを止めた。それを見たなのはは、やっぱりね、という表情になってまるで二人を追い詰める様に再び言葉を紡ぎ出す。

「まともな戦力と言えば、ハラOWN執務官と提督の二人くらい。残りは、せいぜいAランクが居るかどうかな? 確かに、あの子と使い魔を捕まえるだけなら、『アースラの切り札』と呼ばれるハラOWN執務官が居れば十分だと思う。けど、次元干渉で空間攻撃を可能とする魔導師がいるなら、話は別。相手の目的がジュエルシードなら、それを抑えられるハラOWN提督は前線には出れない。そして、私の予想では空間攻撃をした魔導師はSランク、もしくはSSオーバー。そんな相手を執務官一人で抑えられる……と?」

「それは……」

「確かに、解決するだけなら平気かもしれない。けれど、それで被害を増大させて隣接する次元を消し飛ばすのと、変な虚勢を張らずに私“たち”に協力を求めるの……どちらにします、リンディ・ハラOWN提督?」

静かにリンディを見据えるなのは。その真意を読み取る事は、クロノには出来なかった。

暫く沈黙と緊張感が辺りを支配する……が、唐突にリンディがため息を吐き出し、諦めた様な言葉を口にした。

「分かりました。正式に貴方たちに協力を要請します。どうせ、私へのツケも彼方のささやかな嫌がらせでしょうし」

「あら、よくご存じで。でも良かったですね。ハラオウン提督の依頼だったら、報酬金額が五割増しでしたよ」

「あ、あははは……感謝しておくわ」

なのはの言っている事は……まあガチだろう。っていうか、目が冗談を言っていない目だ。

話はまとまった。なら、残るはこれからの事だ。これからの事……つまり、フェイト達の事だろう。事実、なのはの口から出てきた言葉は、彼女たちの事だった。

「さて、問題のジュエルシードは、あの子たちが持っている物以外は私たちが回収しました。恐らく、明日にでもあの子たちは真っ正面から勝負を仕掛けてくるでしょうね」

「その根拠は？」

「あの子たち、多分そんなに余裕が無いんですよ。今回強引にジュエルシードを回収しようとしたのが、その証拠です。だったら、こっちが何か仕掛ける前にあっちから勝負を掛けてきますよ」

まあ、あの天然少女がそこまで考えているかは微妙だけど、となのはは頭の中で付け加えた。

確かに余裕が無いのは確かだ。これはなのは知る由では無いが、直接勝負を挑むとフェイト言い、アルフが焦ってプレシアの所に行ったのが良い証拠だ。

「とりあえず、あの子は私が担当します。敗けるつもりは微塵も無いですけど、どちらが勝とうが控えた魔導師が手を出してくると思いますので、座標の逆探知、お願いしますね」

「了解したわ」

「――じゃ、私たちはそろそろ帰ります。シグナムさん、あとユーノ君も帰るよ」

「む、漸く終わったか。ああ、ついでにこの菓子はもらっていく」

「え、遠慮が無いですね……って、僕も？」

「どうせ行く場所ないでしょ？ どうせ明日には仕掛けてくるんだし、丁度良いからね」

全く遠慮を知らないシグナムはさて置き、呼ばれたことに疑問を感じるユーノをあっさりと説き伏せるなのは。

どうやら、かなりユーノの事を気に入ったらしい。本人にその自覚があるかは、本人にしか解らないが。

兎に角、本日の対談は終了。残るは……少し長めの始まり（プロローグ）の終わりを……始めるだけだ。

翌日、時は明け方。そんな普通の人間はまだ寝ていそうな時間に、ベッドで何かを考えながら天井を見つめるオレンジ髪青年——裏月は起きていた。

「なあ、^{げってん}月天」

少しそうして居ただろうか、彼は自分以外に誰も居ない筈なのに誰かの名前を呼ぶ。

『何だよ、相棒』

だが、そんな声に応える誰かが居た。それが聞こえた場所には、一つの本がある。真っ白な色に表面には半月の紋様が描かれた本。

それが確かに返事をしたのだ。当然ながら話し掛けた彼、裏月は驚くことなどなく話を続ける。

「ぼ……俺もさ、斬月やお前がいなかったら……プレシアみたいに なってたのかな？」

『さあな。所詮IF……もしもの話だ。俺には解らねえよ』

「そっか——んじゃ、往くか？」

言いながら、ベッドから降りて月天と呼ばれた白い本——魔導書——を持つ。その口振りは、もはや決定事項の様なニュアンスだった。

それを聞いた月天は……もし彼が人間の姿ならば、当然という表情を浮かべていただろう。

そんな二人の前に——いきなり扉を開けてオカッパ髪青年が入って来る。その人物を見た裏月は……途端に呆れた様な表情になった。

「お前、何でここに居るんだよ、真子」

「いやな、何か面白そうな事が起こりそうやったから、来てもうた」

「来てもうた、じゃねえよ。まあ良いか……往くぞ」

返事はない。だが無くとも解る。それだけ長い付き合いという事だ。まあ、こないきなりな事態にもさらっと対応できるようになったのは……裏月にとって嬉しいのか嬉しくないのか。それはともかく、遂に彼らも動き出した。役者は——揃いつつある。

「フェイトちゃん、出てくれば？ 居るんでしょ？」

同時刻、海鳴臨海公園。そこで言葉を放つのは、高町なのはだ。その言葉に反応してか、電灯の上に黒衣のバリアジャケットを纏った少女、フェイトが現れる。

そのフェイトを見据えるなのは表情は、少女には何を考えているかは解らない……だが。

「ジュエルシードを——」

「私に勝ったら、全部上げるよ」

「——え？」

自分の言葉を遮った少女の言葉に、フェイトはポカンという表情になる。が、少女がデバイスを起動して前に見た武装を展開したのを見て、急いで表情を引き締める。

「ふふ、ちょっと遊んで上げる。——かかって来なさい」

「……はあっ！！」

油断は無い。そこまで言われて、黙っている訳にはいかないフェイトは自身のデバイス、バルディッシュを持ち……一気に加速した。

一撃で沈める——そう考えるフェイトは失念していた。あの時……自分たちがてこずっていた物をあっさり対処してみせた人物が、誰なのかを。

振るわれた黒い鎌、一撃で相手の意識を墜とす為のそれは——あっさりと弾かれてしまった。

「ッ！？」

「さて、出来損ないの魔法使い……ここでは処刑人^{エグゼキューター}とでも名乗ろうかな？」

いつの間にか抜き放った魔力で刃が構成された武器、マギリングサーベルを持ちながら、言う。

少女は身を持って知る。自分が否に無謀な戦いに挑んだかを。後悔など……出来ない。いや、そんな事をする暇など無い。

その事を――少女は思い知る事になる。

また同じ時、一匹の小さな犬が人気の無い公園で倒れていた。どこも怪我をした様子はないが……必死に動かない身体を動かそうとするのは、たった今戦闘開始したフェイトの使い魔、アルフだ。

何時もとは違う姿なのは、極力魔力の消費を抑える為。しかし、自身のマスターとのリンクを切られた状態では、とてもでは無いが魔力の回復は間に合わない。

万事休す……そう思った瞬間、自分の身体が誰かに抱えられる感覚をアルフは感じた。

「無事か？ ……この残留魔力の感じ、プレシアだな」

「あ……アンタ、プレシアを知っているのかい？」

「まあ、一応友人と言ったところか」

「だったら頼むよ……フェイトを……プレシアを助けてくれっ!!」

「――ああ、任せておけ」

アルフの必死の頼みに迷いなく青年――斬月は頷く。また一人、役者は舞台に出揃い始める。

少し時間は進み、一人の美少女に見える少年――ヒナギクが繋いでいた電話を切って、携帯をしまい呟く。

「さて、私の弟子には悪いですけど、そろそろ派手に動きましょるか……ん、貴方は」

「冬獅郎？」

近づいてきた人物の状態……を本人が名乗る前にヒナギクの近くに居たさくらが当てる。

当てられた少年——冬獅郎が微妙な表情をしながら口を開いた。

「……たくっ、俺の主も人使いが荒い。お前らを手伝ってやれ、だつてよ」

「あら、雪華ちゃんにはバレてました？」

「そこは、俺の主がちょっと変わってるって思ってくれ」

「うにゃあ、それは言って良いの、冬獅郎？」

……因みに、彼が自分の主が直接行こうとしたのを必死に止めたのは別の話だ。

「てめえ、自分の職業考えろよっ!?! 怪我したらどうすんだ!?!」とか「——もしかして、アイツに惚れたのか?」とか言って頑張っ
て説得したとだけ、彼の頑張りを報告しておこう。

「じゃあ、そろそろ行きますか」

「どうやって行くんだ?」

「知り合いの一人でも居れば、大雑把でも転移できるんですよ、私は」

言いながら、彼は背中から“翼”を生やす。一對、二枚の純白の翼。その翼が、願いを受けて光輝く。

運命を背負う者……ヒナギクも舞台へ上がる。後は――幕が上がるの待つだけだ。

時間は戻り、空中に舞台を移し海上で白と金の軌跡を描きながら互いの得物で斬り合う、なのはとフェイト。

だが、その表情は対照的。フェイトは厳しい表情を浮かべ、なのはは終始軽い表情を浮かべている。

フェイトが先端に魔力刃を成形した形態、サイズフォームのバルデイッシュを横風ぎに振るう。が、それは身体を一回転させながら刃を躲し、その勢いを殺さずにマギリングサーベルを振るった。

「ほらほら、もっと上手く避けないと当たっちゃうよ？」

「くっ……このっ!!」

ギリギリで避けたフェイトを嘲笑うかの様に、なのはは余裕の表情だ。

そんな少女の態度に苛立ちながらも、何とか冷静さと保ち距離を取り、体の周囲に^{フォトンスファイア}発射体を成形し攻撃に転じる。

「フォトンランサー！ ファイ」

「遅い」

しかし、その四つのスフィアから放たれる筈だった物は、放たれなかった。なのはの左手には、スフィアを一瞬にして全て撃ち抜いたマギリングライフルがある。

フェイトは再び驚愕を隠せない。今の魔法は、自分の中でも信頼の置ける物だ。それをあっさり対処されただけでなく、遅いとまで断じられるなんて。

接近もダメ遠距離もダメ。ならばどうするのか？ 少女の頭では必死に戦略を練っては、すぐに無駄だと破棄していく。

「どうしたの？ まさか、もうお終いじゃないよね？」

「っ……はああああああっ！！！！」

「——へえ。まだやれる見たいだね」

当然だ。自分は敗ける訳にはいかないんだ。少女は、自分の魔力を込められるだけ魔力刃に込めていく。

同時に、瞬間的に加速できる状態にもする。自分が今からするのは、策も何も有ったようなものではない。だが、相手の少女に対して策が無いなら、真っ正面から力で勝負を挑むしかない。

フェイトは——一気に加速、バルディッシュを全力で振り下ろした。対するなのはは、ライフルをしまった左腕で三角形のシールド、ラウンドシールドを成形してそれを防ぐ……が、全力で魔力を込めた攻撃だ。シールドに刃が食い込み、どんどんと罅が入っていく。

——この距離なら砲撃は撃てない。いける!!

「ねえフェイトちゃん、二つ良い事を教えて上げる」

「え……?」

だが、そんなフェイトの考えとは裏腹に、なのはの表情は全くの余裕。

フェイトはこの時点で気付くべきだった。なぜ、速くともこんな単調で事前予測が可能な攻撃を……彼女は“片手”で防いだのか。

「覚えといった方が良いよ。“最良の戦術を行う時こそが、最大の危機”そして——」

「なっ!?!」

なのはの空いた右腕……それが、シールドの内側に魔力球を成形し、なのはが右腕を溜める様に引く。

それに反応したフェイトがすぐに後退しようとするが、食い込んだ刃の所為で一瞬だが行動が遅れる。

退避するフェイトに向かって……なのはは遠慮なく魔力球を“殴った”。

「私が砲撃を撃てるのは——フリーダムからだけだと思わないでよっ!!」

「くっ、ああああああああっ?!?!?」

殆ど零距离から放たれた砲撃。圧縮された桜色の魔力が、強引に展開したシールドごとフェイトを押し返していく。

なのはは一度魔力を圧縮、そして自身の拳でそれを爆発させる事によって砲撃を放つことが出来る。つまり、現時点で彼女オリジナルの砲撃魔法とも言える、ディバイン・バスターのカウンターバージヨン。

当然、そんな物を零距离から喰らおうものなら只では済まない。ギリギリでシールドを張ったとはいえ、バリアジャケットは半壊状態になり何とか防ぎ切れたくらいだ。

そんな彼女の四肢体を……白い光の輪が拘束した。

「えっ!?!」

レストリクトロック。バインド系統の魔法で、発動から完成までの間に指定区域内から脱出できなかった対象全てをその場に拘束するもの。なのはが指定したのは、フェイトが突撃した場所から自分の場所まで……つまり――

「ゲームオーバーだよ、フェイトちゃん」

ハイマツトモードの翼を展開し、なのはがフェイトを見下ろす。

言いながら、彼女が胸の前でパン、と両手を合わせる。それはまるで……神への祈りを捧げる様だった。

両手を合わせたのはが、少しずつ合わせた手を放していく……その中心には、桜色の球体が魔力を凄まじい速度で吸収していた。

バインドで縛られたフェイトが、自然と震える声でその魔法の正体を言い当てる。

「集束……砲撃っ!？」

「ご明察。見せて上げるよ、私のとっておきをねっ!!」

大きく広げたなのは手の間に、圧倒的な魔力の塊が集束していく。スパーク音を鳴らし、圧倒的で暴力的な大きさと光を放つ魔力球。フェイトの目が確かなら、展開された翼が輝き……純白、そして“黄金”の輝きを放ち出す。

その姿は、見る者によっては天使にも悪魔にも見える。

「エグゼ——」

なのはが魔力球から手を離し、自分すら隠れる程に大きくなったそれに向かって拳を溜める。

だが確かなのは——彼女が相手を断罪する様にも見えるという事だ。

——なのはが拳を叩きつける……同時に、圧倒的な光が爆発した。

「——キュータアアアアアア——ッ!!!!!!」

解放された光は、先ほどの砲撃とは比べ物にならない程の大きさとフェイトの視界を覆い尽くし——断罪の光が、少女の意識をも呑み込んだ。

「か、仮にもAAA相当の魔導師を相手に、全くの無傷で勝利する

なんて……」

「まあ、彼女が噂どおりの処刑人なら、エグゼキューター当然の結果とも言えるかもしれないな」

「……ねえクロノ君。この前から思ってたんだけど、自分より年下の女の子相手に、その呼び方は酷いんじゃない？」

映されたのはとフェイトの映像を見て言うクロノに、オペレーターのエイミーは苦言の様にそう言った。

だが、それを聞いたクロノにとっては違うのだ。そう、馬鹿馬鹿しいと自分でも思うが、彼女は……高町なのはとてもでは無いが年下には見えない。

「僕にとって、彼女は年下のようにには感じられないんだ。彼女と話していると……まるで自分より年上と話しているように思えてならない」

「ははは、そんなバカなことが――」

「ふーん、まあ当たらずとも遠からず、ちゅう感じやな」

唐突に聞こえる第三者の声。その声に二人が急いで振り替えると、そこには薄笑いを浮かべる青年、市丸ギンが気配も無く佇んでいた。

「き、キミは誰だ!?!」

「なのはちゃんの言う通り、本当に定番の返ししかせいへんのね。あ、ボクはなのはちゃんの相棒ってところやな。ちゃんと艦長さんに

許可とつとるよ。って言うかええの？ 何か雷落っこちらで来とるけど」

「ああっ！？ い、急いで逆探知しなくちゃっ！！」

映し出されたモニターには、丁度バルディッシュが取り出したジュエルシードが、空に吸い寄せられる様に消えていく。それをしたのは、もちろんフェイトの母親であるプレシア。彼女の行動に、何とか意識を取り戻していたフェイトは動揺を隠せない。

そんな少女を掴んで、なのはは迷わずアースラの艦内に転移した。転移先で待っていたのは、つい先程までクロノ達と居た筈のギンだ。自分の相棒の自由奔放さは何時もの事なので、特に驚きもせずなのはは彼に状況を訊く。

「状況は？」

「座標の逆探知に成功。武装局員が乗り込んだとこやね」

「そう……行くよ、ギン」

返事までは聞かず、なのはは考え込んでいるフェイトの手を取り艦内をずんずんと突き進む。

「その子、なんも拘束せんでええの？」

「必要ないでしょ。集束が微妙だったとはいえ、私の『エグゼキューター』を喰らったんだから。それより……急ぐよ」

最後の一言、その意味をギンは正確に理解していた。そう、恐らく

武装局員など意味をなさない。

それを肯定するかのように、アースラのブリッジに入ると同時に武装局員の悲鳴が聞こえた。

艦長のリンデイが、急ぎ武装局員の回収を指示していたが、なのはの瞳に映っていたのは、モニター越しに此方を……フェイトを見るプレシア・テストロッサだ。

「母さん、どうして……？」

「ごめんなさいね、フェイト。でも、私は行かなきゃいけないの」

「母さんっ!？」

突然、なんで自分の母はこんな事を言いだすのか。フェイトには叫ぶ事しかできない。

そして、プレシアが語りだす。なのはは……止めない。これは、少女にとって乗り越えなければいけないことだから。

「聞いてフェイト……貴方は普通に生まれたんじゃない……私の娘、アリシア・テストロッサのクローンなのよ」

「……ク、ロー……ン? 私、が?」

震え、途切れる声でフェイトが何とか言葉を絞り出す。そんな少女を見ながらも、プレシアは語ることを止めない。これが自分の罰だから……と。

「そう。アリシアが死んで、何もかもが虚しくなった私が生み出し

たクローン……それが貴方よ。でもね、貴方の存在で私は救われた。私が元気が無い時は、いつも笑顔を見せてくれた貴方が居たから。けど……やっぱり何処かでアリシアの影を追いつける私が居たの」

「母さん……!!」

「だから——もう往くわ」

もはや話すことは話した。そう言わんばかりの表情で、プレシアはジュエルシードを同時発動させた。

途端、小規模ながら次元震の発生をアースラのオペレーターが観測の報告をする。

そして、光り輝くジュエルシードを見ながら、プレシアは本当に小さく呟いた。返事など、誰にも期待していなかった。

「やっぱり……もう戻れないのよ」

「——それはお前次第だろう？」

——だが、確かに誰かが言葉を返す。プレシアが振り替える、同時に玉座の間に転移の魔法陣が広がり、中心に誰かが——いや、彼女も知る人物が舞い降りた。

「久しいな……プレシア」

同時に、アースラのブリッジにも誰かが侵入する。その二人の内、一人……オレンジ髪青年がモニターを見て、言った。

「相変わらず、テメーは来るのが遅いつての」

さあ、終わりへと誘われた始まりの舞台の――開演。

第9話（後書き）

Q スターライト・ブレイカーじゃない……だと……？

A 後で出るかもね。

Q あれ、何かプレシアの性格変わってね？

A 双剣士でも似たようなものだから良いよ（オイ） 外伝だとも
つとぶっちゃけたキャラがみられるかもね（↑告知すんなや）

まあそんなこんなで、これから出るキャラと仕事柄の都合上、冬獅
郎が却下した雪華以外の主要メンバーがやっと同じ舞台に出揃いま
すよ。

次からは、ぶっちゃける感じのもののオンパレードになりますww
そんな感じで次回予告……！

次回の烈火の翼は……！

「庭園内に魔力反応を複数確認、いずれもAクラス。数は……何こ
れ！？ 三百、三百五十、どんどん増えていきます……！」

『ドライブ・オン。武装コード、ソードブラスター『メサイア』起
動』

「要はアレを壊せば良いのだろう？ 往くぞ、天鎖斬月——ホロウ虚化」

「遅かったな——裏月」

「はっ、テメーに言われたかねーよ——斬月」

次回、『チェンジchAnge』

「フェイトちゃんが変わった先には……きっとお母さんがいるよ」

「死者を蘇らす事なんて……出来やしねえんだよ」

歪んだ物語が——また加速する。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8593x/>

魔法少女リリカルなのは 烈火の翼

2011年12月25日15時54分発行